

令和元年度 筑波大学附属学校研究報告

附属学校群の新たな試み

～境界を乗り越えて～



(附属坂戸高等学校での国際フィールドワーク)

令和2年2月22日(土)

筑波大学附属学校教育局

目 次

I 附属学校研究発表会報告

- 1 はじめに（教育長挨拶）・・・・・・・・ 1 頁
- 2 全体会 シンポジウム「黒姫・三浦の共同生活の意義と展望
～5年間の共同生活を振り返って～」・・・・・・・・ 2 頁
- 3 分科会
 (1) 分科会 1
 『演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創』・・・・・・・・ 9 頁
 (2) 分科会 2
 『ICTを活用した授業実践 ～附属学校群での実践を通して～』・・・・・・・・ 10 頁
 (3) 分科会 3
 『グローバル教育の進め方～ラウンドテーブル形式による課題の検討』・・・・・・・・ 11 頁
- 4 事後アンケートの結果・・・・・・・・ 13 頁

II 筑波大学附属学校教育局・附属学校について

- 1 附属学校教育局・・・・・・・・ 16 頁
- 2 附属学校の主要な沿革・・・・・・・・ 16 頁

III 附属学校教育局プロジェクト研究報告

- 1 プロジェクト研究 1
 『交流及び共同学習の実践と評価に関する心理学的研究』・・・・・・・・ 20 頁
- 2 プロジェクト研究 2
 『演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創』・・・・・・・・ 21 頁
- 3 プロジェクト研究 3
 『中高生のインターネット依存の現状と支援に関する研究』・・・・・・・・ 23 頁
- 4 プロジェクト研究 4
 『ICTを活用した授業実践の共有と公開～授業実践を持ち寄って、
 筑波の附属から普段使いの ICT 活用法を発信しよう～』・・・・・・・・ 24 頁

IV 附属学校の研究概要

- 1 附属小学校・・・・・・・・ 25 頁
- 2 附属中学校・・・・・・・・ 30 頁
- 3 附属高等学校・・・・・・・・ 32 頁
- 4 附属駒場中学校・附属駒場高等学校・・・・・・・・ 34 頁
- 5 附属坂戸高等学校・・・・・・・・ 36 頁
- 6 附属視覚特別支援学校・・・・・・・・ 38 頁
- 7 附属聴覚特別支援学校・・・・・・・・ 41 頁
- 8 附属大塚特別支援学校・・・・・・・・ 45 頁
- 9 附属桐が丘特別支援学校・・・・・・・・ 47 頁
- 10 附属久里浜特別支援学校・・・・・・・・ 49 頁

I 附属学校研究発表会報告

1. はじめに

筑波大学附属学校教育局教育長 茂呂 雄二

境界を乗り越える（バウンダリー・クロス）という言葉は、最近の学習科学や学習心理学で耳にする言葉です。従来の学習のとりえ方が、外部から設定された枠や、与えられた条件に適応することが中心で、学びの本質を捉え損ねていたのではないかと、むしろ学びは今の限界を突破して、新しい見方、新しい感じ方、いままでにないパフォーマンスを作り上げることにある、現代の学習心理学はそう考えます。



そもそも本学のスローガンは、開かれた大学でありボーダーレスな学びの環境を作ることにあります。境界を乗り越えることは、本学の建学の理念に通じる大目標であり、その目標の中で附属学校群が果たすべき役割は、日本社会の喫緊の課題である、インクルーシブな社会の実現のための実験教育と人材育成にあります。

今回の研究発表会は、新しい学びの捉え方を正に体现しつつ、インクルーシブ社会実現のための実験教育に関しての、附属学校と教育局による研究成果のショーケースとなることを念頭に開催しました。校外からの参加も増え、95名の方々に参加していただき、この場を借りて御礼申し上げます。

研究発表会式次第

◇ 研究主題 附属学校群の新たな試み ～境界を乗り越えて～

◇ 日 時 2020年2月22日（土）13:00～17:00（受付12:30）

◇ 会 場 筑波大学東京キャンパス文京校舎

全体会 134 講義室、分科会 120・121・134 講義室、多目的講義室 2 (BF1)

◇ 次 第

【全体会】13:00～14:30 134 講義室

開会の辞

シンポジウム「黒姫・三浦の共同生活の意義と展望 ～5年間の共同生活を振り返って～」

《休憩／ポスター展示（説明・懇談）14:30～15:00》

【分科会】15:00～16:30

分科会 1『演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創』 多目的講義室(BF1)

分科会 2『ICT を活用した授業実践 ～附属学校群での実践を通して～』 120・134 講義室

分科会 3『グローバル教育の進め方～ラウンドテーブル形式による課題の検討』 121 講義室

【全体会】16:40～17:00 134 講義室

分科会報告 閉会の挨拶

※URL：<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

※お問合せ：筑波大学 東京キャンパス事務部企画推進課 大学連携・外部資金担当

TEL：03-3942-6811

2. 全体会 13:00～14:30 134 講義室

シンポジウム「黒姫・三浦の共同生活の意義と展望 ～5年間の共同生活を振り返って～」

コーディネーター 小林美智子（附属学校教育局教育長特命補佐）

以下の趣旨説明の後、5つの発表とそれに対する意見交換を行った。

2015年度に、従来から実施していた2校間交流を発展させ、附属学校群としての魅力ある交流活動として「黒姫高原共同生活」を発足させた。その後、全11校（普通附属6校：小学校1、中学校2、高等学校3、特別支援学校5：視覚、聴覚、知的障害、肢体不自由、自閉症等）による交流への拡充をめざし、2019年度に場所を三浦半島に移して「三浦海岸共同生活」を実施した。この5年間、教職員と生徒は実行委員会を立ち上げ、障害や多様性の理解を念頭に心のバリアフリーに対する意識の向上と個性の伸張を図ってきた。この共同生活で児童生徒はどう変わっていったのか、この企画を通して筑波大学附属学校群がインクルーシブ教育として何を発信するのか、さらにどう発展させるのか等について、議論を深めたい。

① 共同生活が目指したもの 濱本悟志（附属学校教育局）

三浦海岸共同生活の動画が放映され、本企画発足の趣旨と5年間の共同生活の特色と推移が示されるとともに、共同生活で児童生徒・教員が得たものが報告された。

② 児童生徒とともに共同生活に参加して 石田周子（附属桐が丘特別支援）

小学生の作文等を通して、参加した児童生徒の視野の広がりや変化が紹介されるとともに、交流する企画の立案上の留意点や教員としての気づきが報告された。

③ 児童生徒の実行委員会を指導して 横山知弘（附属聴覚特別支援）

児童生徒実行委員を指導した立場から、児童生徒の情報保障等の配慮への工夫や成長の様子が紹介され、距離を縮め絆を太くする重要性和教師のフォローが報告された。

④ 児童生徒の意識調査から 小島道生（附属学校教育局）

参加した児童生徒のアンケート調査の結果から、事前事後及び経年の変化が分析され、障害の有無に関係なく対等の関係で活動に参加できる状況の重要性が報告された。

⑤ 私にとっての共同生活 水江光希（卒業生、筑波大学生）

参加した3年間の共同生活を通して自分の障害と向き合える機会になり、自分で最善の方法を作り出し、その自信が次の行動を引き起こす重要性が報告された。



⑥ シンポジストの意見交換

【事前と事後の学習について】

事前学習会を通して踏み出すことの大切さ、車椅子研修会等を通しての安全面の配慮、異なる障害を持つ児童生徒が感じている困難を知ること、事前交流でのアイス・ブレイクの重要性、自ら声をかける努力の大切さ等について発言があった。

【今後の活動について】

低年齢からの交流の促進、共同生活後のつながりの継続、学術的な立場からの客観的な分析と発信、筑波型インクルーシブ教育としての発信等についての発言があった。

【配布資料】

共同生活が目指したもの



黒姫高原



三浦海岸

筑波大学附属学校教育局 濱本 悟志

1

筑波大学附属学校群での共同生活とは

- ◇ 附属学校群の特色(千葉、埼玉、東京、神奈川)
 - ・普通附属6校 (小中高、駒場中高、坂戸高)
 - ・特別支援が5校 (視覚、聴覚、知的障害、肢体不自由、自閉症)
- ◇ 従来より2校間交流は実施
 - ↓ 筑波の附属学校群しかできない企画への挑戦
- ◇ 2015年度より合同合宿(2泊3日)を実施
 - ・2015～2018年度 黒姫高原で実施(7→10附属)
 - ・2019～ 三浦海岸で実施(11附属)

2

【目的】

多様な個性をもつ児童生徒が、共同生活をしながら野外活動や物づくりを含む多彩な交流を経験することによって、心のバリアフリーに対する意識を向上させるとともに個性の伸張を図る。

↓

映像をご覧ください

3

5年間の推移(黒姫高原 → 三浦海岸)

	小学校	中学校	高校	駒場	坂戸	視覚	聴覚	大塚	桐が丘	久里浜	計
2015年	0	7	5	11	12	0	3	10	5	0	53
2016年	8	15	3	9	15	0	10	9	4	0	73
2017年	8	11	16	10	10	2	8	10	5	0	80
2018年	10	13	10	8	9	7	7	7	3	0	74
三浦海岸 2019年	16	15	12	7	17	8	5	6	6	6	98

4

◇ 共同生活で児童生徒・教員が得たもの

年齢、環境や文化、障害などが異なる者同士が寝食を共にし、一緒に楽しむために努力し、その素晴らしさを知ったこと。

【具体的に】

- ・安全安心だから冒険できることの大切さ(工夫の楽しさ)
- ・リーダーとフォロワーは一緒に育つ
- ・一緒に同時に楽しむことの大切さ(工夫の楽しさ)
- ・心のバリアフリーと主体性

◇ 今後の課題

参加した者は、この成果を外に発信し共有してほしい。

5

附属学校研究発表会 シンポジウム「黒姫・三浦の共同生活の意義と展望」

児童生徒とともに共同生活に参加して

附属桐が丘特別支援学校
教諭 石田 周子

6

共同生活実施前

● 共同生活に参加するようになったきっかけ

● 実地踏査で感じたこと

- ・やると決まっからのスピード感がすごい
- ・北陸新幹線、大宮集合！
- ・不安が多い (バリアの多さ、タイトなスケジュール)
- ・他校の視点を知る

7

共同生活実施前

【参考】桐が丘の宿泊実施案(細案)

時間	子どもの動き	教員の動き	車中	トイレ	ボラ
8:00	バス乗車	バス乗車	バス乗車	バス乗車	バス乗車
8:40	学校(トイレは保護者と済ませておく)	学校(トイレは保護者と済ませておく)	学校(トイレは保護者と済ませておく)	学校(トイレは保護者と済ませておく)	学校(トイレは保護者と済ませておく)
9:00	バス乗車	バス乗車	バス乗車	バス乗車	バス乗車
9:10	学校出発	学校出発	学校出発	学校出発	学校出発
10:10	ボニー公園 着	ボニー公園 着	ボニー公園 着	ボニー公園 着	ボニー公園 着
10:30	乗車体験	乗車体験	乗車体験	乗車体験	乗車体験

8

2015(平成27)年度

- ・ぎこちない空気を、小3児童の「やりたい！」がこわす
- ・小6児童はハイテンションになり過ぎて、2日目に体調を崩す
- ・桐が丘では考えられない世界に出会う
(部屋で勉強やテレビ、集合5分前に起床、もはやフォトフレームではない作品)
- ・3日間過ごす意味

9

2016(平成28)年度

- ・直前に相模原の事件が発生する
- ・実施後の小6児童の作文から、共同生活で得たものの大きさを感じる
→共生シンポジウムで発表

10

2016(平成28)年度

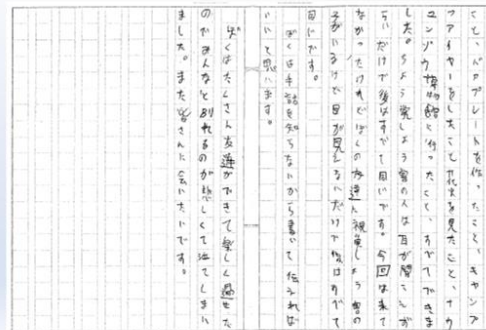
【参考】小6児童の作文



11

2016(平成28)年度

【参考】小6児童の作文



12

2017(平成29)年度、2018(平成30)年度

- ・直前に泣いて「行きたくない」と言った小4児童の背中を押してくれた保護者
- ・視覚特別支援学校も参加するようになる
- ・生徒たちが自ら情報保障や企画を考える
→様々な障害について学ぶ機会となる

13

2019(令和元)年度

- ・黒姫から三浦へ、そして久里浜も参加
- ・教職員企画のウォークラリーを担当する

コンセプト

- ・障害や発達段階への理解を促す
- ・主体的に気付いたり理解を深めたりすることをねらう
- ・五感や量感を養う活動を多く取り入れる(障害の有無に関わらず、身体感覚を意識する)
- ・児童生徒の交流が増えるような活動を取り入れる
- ・お膳立てしすぎず、児童生徒が自分たちで工夫して解決することをねらう
- ・三浦海岸の生き物に親しめるようにする

→共同生活で学んだことをいかす

14

●共同生活に参加した桐が丘児童生徒の変化

- ・行く前は不安→楽しい、何とかやれる
- ・他の障害に関心をもつようになる
- ・受け身でなく、自分ができていることをする
- ・桐が丘以外の世界に目を向ける
→他附属の文化祭を訪れる
→普通高校へ進学する

15

●私自身が共同生活に参加して感じたこと

- ・他附属の児童生徒、先生方が身近になる
- ・附属の児童生徒の力を知る
→飾らない表現、一歩ずつ進む姿
- ・附属の先生方のすごさを知る
→子どもたちが主体的に動くまで見守る関わり
- ・気付きにつながる仕掛けが必要
→配慮し過ぎないことが大事
- ・とにかく考え過ぎずにやってみる！

16

●今後に向けて

- もう一歩踏み込んだ障害の理解を期待したい
→しおり、アナウンス等の情報の伝え方
→分かりにくい障害による難しさ
- 社会に出てからも共生に関心を持ち続ける人を育成したい
→学びの継続
→社会を変える人材

17

共同生活生徒実行委員会 を指導して

18

共同生活参加1年目（2017年度）は通訳者のつもり

- 下山先生、実行委員長の用意の良さにびっくり
- 実行委員会の各グループではすでにパソコンテイクが行われていた。
- 最後に行われるまとめの会議でも、リアルタイム文字通訳
- それでも仕事を探して……

19

これってかえって交流を邪魔してないか？

- 通訳者としての出番を探して
- 情報伝達が遅いかもしれないグループに通訳に入りました。
- 普通校の諸君 → 聴覚の生徒と交流ではなく→手話に関心
- 手話を通訳者に尋ねる

20

求められない限り、通訳はしない

21

生徒実行委員会における文字通訳の実際

今から班活動に入るのて班ごとに集まりましょう。
足元気をつけましょう。コンセントがあるので、
真ん中がしおり、右がキャンドル、自由時間とバスレクは左の方で、
ー
ー自由時間とバスレク しおりも キャンドルー
ー
ー
始めますよ！！！！！！！！！！！！！！！！
今から45分間班別集会を行ってまいります。
今から回って班長にプリントを回すので会議の内容を記録して下さい。
あとで班長には報告会をしてまいります。
ー
あと5分です。、

22

事前交流会での 手話歌と視覚の生徒

- 当日、本校の生徒から、
- 視覚の諸君が疎外感を感じないか？心配！との申し出。
- 触手話 による 通訳を生徒に紹介
- 待機させた
- 視覚の先生に、触手話 による 手話の紹介の許可をいただいた
- 生徒にGOサイン

23

生徒が交流を深めたい時

方法を紹介

環境を整えること

24

キャンドルファイヤーでは全方位から文字通訳を見られるように、スマホ配信

- Wi-Fiの強度が足りずに、アクセスが滞った時もあった。
- 次の年度にはホテルの協力を取り付け、Wi-Fiおよび外部回線の帯域を拡大。
- アクセス量を抑えるために、普通校の諸君に協力を要請



25

バスレクでは力仕事

- ・事前準備も、共同生活当日も
- ・室内においては、情報保証環境の完成度は高く、聴覚の教員の出番はなかった。

次年度に向けて、下半身のウェイトトレーニングを

26

2年目（2017年度）

手話通訳者の出番をなくす

- ・バスレク系の生徒から
- ・生徒主体のはずが
- ・バスレクでは教員に頼り切りの部分がある。

27

バスの車内TVをPCとつなぎたい。

- ・バスの車内にあるディスプレイの入力端末
- ・濱本先生のご尽力でバスの機材の種別が確定。
- ・ビデオ端子入力なので、ダウンスキャンコンバーターを



28

2017年度の夜ミーティング

完全を目指すためには何が足りないのかを中心とした議論。

完成度100%の状態はどのような状態かをも議論

あしがかりとなるものがなかなか見いだせなかった。

最終的にはまずは、あいさつ をして、心と心の距離を縮めようということに

29

今年度の夜ミーティング

- ・2017、2018の反省から
- ・そのまま任せると、各自が自分に対して厳しすぎるので
- ・完全を目指すために足りないものが列挙され、結局足がかりを得ないまま進展しなくなってしまうと考えた。

30

中学1年生の委員長から相談

- ・どうしましょうか？
- ・確認ではなくアドバイスの要求と判断

- ・「今の時点で何ができているか」をまず把握してください。
- ・できていることを足がかりとしてどのように発展させていくかを考えてください。
- ・お願いした。

31

共同生活で児童生徒が得たもの

- ・障害ゆえに感じている距離は縮められる。と言う感覚。
- ・距離を縮めた後に、絆をより太くしたい と言う意欲

32

共同生活で教員が得たもの

- ・他校の生徒との距離感
- ・他校の生徒への接し方
- ・他校の生徒のフォローの仕方
- ・これらを自校の生徒に應用して指導の幅を広げることができた。

33

「今後の課題」

- ・縮めるべき距離は 障害 だけではない。
- ・絆を太くする方法などを

34

黒姫・三浦共同生活の 成果と課題 生徒を対象としたアンケート調査から

附属学校教育局
小島道生

35

黒姫；生徒を対象としたアンケート調査から
事前・事後の比較から（小島・下山ら、2016）

- ・児童生徒の共感性については変化がみられなかった。
- ・しかし、障害者に関する意識については、「障害のある人が通常環境で活動が可能になるように施設や設備を改善していく必要があると思う」という項目で有意に得点が高くなった。
- ・したがって、黒姫高原共同生活における様々な活動を通して、障害のある人が活動可能となるように施設や設備を改善していく必要性をより一層強く認識するようになったと考えられる。

36

黒姫；生徒を対象としたアンケート調査から
事前・事後の比較から

- ・生徒の障害者に対する意識は、黒姫高原共同生活における様々な活動を通して、障害のある人がもっと活動に参加できるようにするためには人々の意識を変えていく必要性があるとより強く認識し、障害のある人への支援について、より積極的に行えるという意識に変化した（小島・下山ら、2017）

- ・参加経験のある対象者ほど障害のある人への支援について、より積極的に行えるという意識になること（小島・下山ら、2018）

37

黒姫；生徒自身にどのような影響を与えたのか？ 1年目→2年目の変化

- ・小島・下山ら(2016) 主に障害観と対人関係面の変容が認められていた。
- ・小島・下山ら(2017) 「障害のある人に対する考え方」と「人とのコミュニケーションの在り方」「人に対する考え方」などの障害観や対人関係面、さらには「筑波大学附属学校に対する考え方」「社会に対する考え方」など学校や社会、「支援機器に対する理解の程度」など多様な側面に影響を受けたと感じている生徒が多いことが明らかとなった。通常学校の児童生徒にとって黒姫高原共同生活は、障害観や対人意識だけでなく、学校や社会に対する考え方、さらには支援機器の理解度など多様な側面に影響を及ぼしていると推察される。今回の実践からは、学校や社会、支援機器の理解度など幅広い領域にわたって影響を与える可能性が示唆される。

38

黒姫；成果（小島・下山ら、2017）

- ・藤嶋・細谷(2016)は、交流及び共同学習の現状と今後の展望について論じるなかで、「交流及び共同学習を実施する際には、単発的ではなく長期的な視点に立ち継続的に計画、実施していく必要がある。また、障害のある児童生徒あるいは障害のない児童生徒のどちらか一方に重きを置いた交流内容を考えるのではなく、双方が一緒に楽しめる活動、双方にとって意味のある活動計画していかなければならない」と述べている。
- ・黒姫高原共同生活のなかでは、野外炊飯、森のアドベンチャーやお土産づくりなど、他者と交流しながら、共に共通の目的に向かって楽しみながら取り組める活動が多く含まれていた。
- ・また、生活と一緒に行う部屋割りにおいても、そのメンバー構成は、同じ学校の児童生徒とは極力一緒にならないように配慮を行った。こうした異年齢・他校種の児童生徒と関わりを持つことができる活動や生活班が構成されたことで、通常学校の生徒の障害観、対人意識や視野の拡大、学校に対する意識など多様な側面に影響がみられたと考えられる。

39

黒姫；障害の有無による違いは？（小島・下山ら、2019）

- ・障害のない生徒の方がある生徒に比べて、暮らしやすい社会になっているとは言い難いと認識していること、障害のある生徒は、他の障害のある人への支援について障害のない生徒に比べると積極的にはいへないことや援助がなくても多くのことができるとは思っていないことが明らかとなった。
- ・影響を受けた事柄については、障害の有無に関係なく「人とのコミュニケーション」が最も高く、障害のある生徒のほうが「支援機器に対する理解の程度」「筑波大学に対する考え方」「人に対する考え方」により影響を受けており、逆に障害のない生徒は障害のある生徒に比べて「社会に対する考え方」により影響を受けていることが示唆された。

40

黒姫；課題（小島・下山ら、2019）

- ・小島・下山ら(2019)では、障害あり群となし群で比較検討しているが、障害あり群のなかにおいても、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由と混在している。今後は、より多くの人数を対象として障害種別に検討していく必要があらう。
- ・また、障害者の支援に関する意識については高い意識であり、天井効果が認められていた。障害者の態度に関する研究において、質問紙による自己報告式の測定では、社会的望ましさに影響されやすく、無意識的・非言語的な態度を測定することはできないとされている（栗田・楠見、2014）。本研究は障害者の支援に関する意識を扱ったものではあるが、社会的望ましさに影響されている可能性も否定できない。したがって、今後は、測定方法の在り方について検討していく必要があらう。

41

三浦；生徒を対象としたアンケート調査から
小島・下山ら（2020）

- ・障害のある人となし人の相互理解が最も進んだと思う活動について尋ねたところ、キャンドルファイヤー、ウォークラリー、生徒実行委員レクが障害の有無に関係なく選択されていた。
- ・障害の有無に関係なく参加でき、協力して取り組める活動、障害のある人が障害のない人に教え、伝えたりするといった対等な関係でかかわることができるような活動を盛り込むことが、相互理解の促進につながると推察された。
- ・最もコミュニケーションがとれたと思う活動として、キャンドルファイヤーと野外炊飯が選択されたことが明らかとなった。

42

今後に向けて（小島・下山ら、2020）

- ・知的障害児との交流の質を規定する条件について分析した研究（楠見、2017）では、健常児へのインタビュー調査において、交流の質を規定する条件として、《関与の可能性》《位置の近さ》《地位の対等さ》《相互性の程度》《快感情の生起》《他者理解可能性》という6カテゴリーとその下位構造を抽出している。このなかでも、《地位の対等さ》を感じさせる下位条件として、＜異質性の目立たなさ＞＜活動の対等さ＞＜気持ちの対等さ＞が抽出されていた。
- ・本研究においても、生徒が相互理解やコミュニケーション面において高く評価した活動については、障害の有無に関係なく対等の関係で活動に参加できる状況が設けられていたと推察される。また、誰もが楽しめるゲームや協力が必要となる課題解決などで異質性も目立たず、対等な気持ちで取り組めるような状況であったとも考えられる。
- ・今後は、こうした交流の質を高める規定要因を考慮しつつ、活動の見直しを行っていくことが望まれる。

43

今後に向けて

1. 事前・事後指導の在り方と活動内容の評価・改善
2. 評価内容と方法→個人と環境、アンケート調査の限界
3. 障害のある生徒のさらなる分析→障害種別、年齢、経験など
4. 小学生、中学生、高校生の影響度に関する検証
5. 長期的影響の検証
6. 外部への発信と評価

44

文献

本報告の詳細は小島・下山ら（2016；2017；2019；2020）をご参照ください。

- ・藤嶋さと子・細谷一博(2016)知的障害児を対象とした交流及び共同学習における学習支援に関する文献的検討。北海道教育大学紀要(教育科学編), 67(1), 191-199.
- ・楠見友輔(2017) 知的障害児の交流の質を規定する条件-交流経験の語りの質的分析-。特殊教育学研究, 55, 189-199.
- ・栗田孝佳・楠見孝(2014)障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望。教育心理学研究, 62(1), 64-80.
- ・小島道生・下山直人・小林美智子・濱本悟志・石隈利紀(2016) 交流及び共同学習の実践的研究-黒姫高原共同生活を通じた児童生徒の変化-。筑波大学学校教育論集, 38, 27-36.
- ・小島道生・下山直人・小林美智子・濱本悟志(2017) 交流及び共同学習の実践的研究-黒姫高原共同生活を通じた児童生徒の変化-(2)。筑波大学学校教育論集, 39, 1-7.
- ・小島道生・下山直人・小林美智子・濱本悟志・茂呂雄二(2019) 交流及び共同学習の実践的研究(4)-障害の有無は、障害を巡る意識の変化に影響するか?-。筑波大学学校教育論集, 41, 9-16.
- ・小島道生・下山直人・濱本悟志・雷坂浩之・茂呂雄二(2020) 交流及び共同学習に関する実践的研究(5)活動内容に対する生徒の評価。筑波大学学校教育論集, 42, 45

私にとっての共同生活

筑波大学1年 聴覚特別支援卒業 水江 光希

46

目次

- 自己紹介
- 共同生活で得られたもの
- 今後の願い

47

自己紹介

- 昨年、筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部 卒業
- 共同生活に参加したきっかけ → 星空観察・友達作り
- 高校3年間、毎年共同生活に参加
- 高校1・2年は、実行委員会として参加

48

通じ合える喜び

「聞く」「聞きたい」
という気持ち



良好な人間関係

自分の障害と向き合える機会

49

障害者と支援者の関係

- ・障
- ・ど

自分で最善の方法を作り出す

.....?わからない

*****だって!

50

共同生活の今後の願い

51

黒姫高原共同生活は

自分の自信になる



次の行動を起こす

52

振り返りを通して

「自分の行動は何が良かったのか」

「こうすれば良かったのかもしれない」

「他の人はどうするのだろう」

成長

53

共同生活の意味

54

ご清聴ありがとうございました

55

3. 分科会 15:00～16:30

(1) 分科会 1 『演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創』

① 音楽を使ったパフォーマンス遊びの実際 若井広太郎・根岸由香（附属大塚特別支援）

はじめに、筑波大学附属大塚特別支援学校で実際に行われている音楽遊びの概要について、若井先生より説明があった。附属大塚特別支援学校幼稚部では、社会性やコミュニケーションの発達支援の方法の一つとして、音楽的活動を取り入れておられ、活動の中で、「動き」や「リズム」の同期、情動の共有や調整などを重視しておられるとのことであった。次に、音楽を使ったパフォーマンス遊びの実際ということで、ワークショップを行った。今回実施したワークショップの具体的な内容は次の通りである。

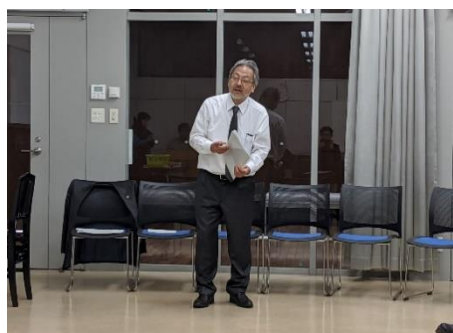
- ・「手拍子送り」で「感覚入力」に注目
- ・「合わせる」「いっしょに」「同期」を体感
- ・「手拍子合わせ」でノンバーバルコミュニケーションゲーム
- ・「まねっこ」ミラーリングゲーム
- ・「つながり教材」の紹介
- ・口腔機能を高める「パンダのたからもの」
- ・「なりきり歌遊び」の紹介

ワークショップの合間に、根岸先生よりスライドを使っの講義が行われた。子供がやりたくなるような環境設定について、ポーズの効果などについての説明があった。



② パフォーマンスとは何か: パフォーマンス心理学ミニ入門 茂呂雄二（附属学校教育局）

パフォーマンス心理学について、茂呂先生より講義が行われた。パフォーマンス心理学とは、新しい発達支援の考え方であり、普通はやらないようなことにあえてチャレンジし実践することが発達の道であり、その様なチャレンジを許してくれる仲間との信頼関係やコミュニティーを作ることが最も重要であるとのことであった。



④ 振り返り

実際に体験したワークショップを振り返り、参加者から自由に意見や感想を出し合った。音楽体を動かしていく上で、有効な手段の1つであるということが、実際に様々な体験をすることで、改めて実感できたなどの感想が聞かれた。

※ 進行の都合から、当初予定していた「自己紹介とアイス・ブレイクのためのインプロ」を割愛し、一部順番も入れ替えた。



(2) 分科会 2 『ICT を活用した授業実践 ～附属学校群での実践を通して～』

附属学校教育局プロジェクト4（幹事：白石 利夫（附属桐が丘特別支援））

いろいろな校種が集まっている筑波大学の附属学校群の各校では、毎日の授業で ICT が活用されています。この分科会では ICT 活用事例から 6 つを取り上げて、校種を問わずに紹介しました。

【進行】 15:00～15:25 134 教室にて、6 人の発表者が一人 150 秒でライトニングトーク
15:30～16:30 134 教室と 120 教室とに分かれて、6 件の提案が行われた。

【提案】

①『小学校理科授業にプログラミング学習をどう位置付けるか』 辻 健（附属小）

2020 年 4 月より小学校では新学習指導要領が全面実施となる。その目玉の一つが「プログラミング教育」である。小学校理科の学習指導要領解説編では、第 6 学年「電気の利用」に「実際に目的に合わせてセンサーを使い、モーターの動きや発光ダイオードの点灯を制御するなどといったプログラミングを体験すること」とある。理科が大切にしてきた問題解決の中でプログラミング的思考を育むにはどのような授業が必要かについて紹介した。

②『スマートデバイスを活用した物理授業の実践』 今和泉 卓也（附属駒場中・高）

“スマホ”（or タブレット）は数世代前では考えられないような高機能を有し、中等教育にも十分耐えうるレベルの各種測定器（スロー動画や加速度センサー等）として活躍できるポテンシャルを持っている。私の担当科目「物理」において、それらの機能を積極的に活用した授業を実践した。また、子どもが夢中になる「ゲーム」という視点も重要と考え、“周期表アプリ”を作成した。ゲームと ICT 教育の関係についても報告した。

③『附属坂戸高等学校の ICT 実践活用事例 ～「1 人に 1 台 PC」実現に向けて～』

井上 卓也（附属坂戸高）

政府が方針を固めた「1 人 1 台 PC」。附属坂戸高等学校では、「生徒のパソコンを学校で使う」という方法で、学校で 1 人 1 台 PC の環境を構築し、授業を行っている。これまで「コンピュータ教室」に頼っていた活動がどのように変化したか……。これまでの取り組みを紹介した。「教師の負担が増えるのでは」「どうやって管理するんだ」といった心配についても対策を紹介した。

④『「動画」を使った授業実践』

八木郁朗（北海道新篠津高等養護学校 現職教員研修員）

タブレット端末の普及により「動画」メディアは、教育の現場にも多く使われるようになった。しかし、子どもたちへの学習において「何が有効なのか」や「教師はどのような支援をすればよいのか」といった活用上の課題についてはあまり検証されていない。本発表では、附属大塚特別支援の生徒



を対象にした授業実践の結果から、「動画」の持つ友好的な支援方法や方法について検証し、簡単に自作できる動画支援教材の作り方について紹介した。

⑤『桐が丘特別支援学校での実践』 白石利夫（附属桐が丘特別支援）

ICT の飛躍的な進歩は、障害による困難を軽減し、学習や生活の幅を広げることができると、大きな期待が持たれている。しかし、非常に有効なツールとして期待される ICT も、有効に活用するには、使用の仕方や環境などのフィッティングが重要になってくる。本発表では、附属桐が丘において、生徒と共に活用のあり方を模索し、生徒たちのいろいろな“やってみたい”を支援してきた実践を紹介した。

⑥『視覚障害向けアクセシビリティ技術の活用—情報アクセスの現状と発展的操作に必要なイメージづくりを中心に—』 内田智也（附属視覚特別支援）

音声ガイドの技術の進歩により、見えない状態でも全ての情報に対し、容易にアクセスができるものと思われがちである。しかし、音声ガイドは、全ての情報に容易にアクセスができるというわけではない。ICT を活用できるようになるためには、様々な積み重ねが必要となる。本発表では、現在よく使用されている音声ガイドの技術を紹介すると共に、音声ガイドの課題点、音声ガイドを用いた ICT 活用に必要な事柄について紹介した。



分科会では、各 3 事例ずつ 2 会場に分かれて発表を行ったが、それぞれの会場には約 20 名ずつ、附属学校の教員だけでなく公立学校の教員も含め、全体では約 40 名程度が参加し、ICT の授業実践の内容、情報教育の関する環境等に関する情報交換を行ったり、これからの ICT 教育の課題等について積極的な意見交換が行われた。

(3) 分科会 3 『グローバル教育の進め方～ラウンドテーブル形式による課題の検討』

この分科会では、参加者がそれぞれの体験を持ちより、今後の附属学校におけるグローバル教育をさらに推進していくための情報共有や意見交換を行った。協議を行う観点として、以下の 3 つの観点について話題が提供され、そのうえで「こんな点が難しい」「こんなときどうしたらいいのか」など活発に意見交換が行われた。

① 海外連携校の開拓・関係づくり

ーインドネシアとどのように関係を維持してきたかー 建元喜寿（附属坂戸高）

- ・長く付き合うには相手の懐に入って生活する必要がある、自分の専門を生かしたスポーツ交流や技術交流などがよい。
- ・現地の先生や学生と森林を守るという計画を一緒に作り、学校だけでなく現地企業とも付き合った。
- ・インドネシアも日本も英語が母国語でないので、ミスを恐れず話せるという利点がある。
- ・シンポジウムで学校や企業が海外からくるので、ポスターセッションなどが出会いの場になることが期待できる。



- ・課題研究ベースの交流で、お互いの調査に協力し合っている。国内外の卒業生からの支援も増えている。

【質疑応答】

Q1：人が変わっても校内ネットワークを維持するにはどうしたらよいか。

A1：周りに声をかけ続けることが大事。最初は乗り気でなかった人が協力してくれた例もある。継続には、1回の交流に留めない、現地の教員と連携できる教員の育成などがポイントである。

Q2：国際海外協力隊の経験から交流へとどうつなげるのか

A2：教員研修で行った青年海外協力隊の期間で、国内外にネットワークを作り、後に活用した。

② 特別支援学校におけるグローバル教育の展開（留学に向けての準備と成果）

佐藤北斗（附属視覚特別支援）

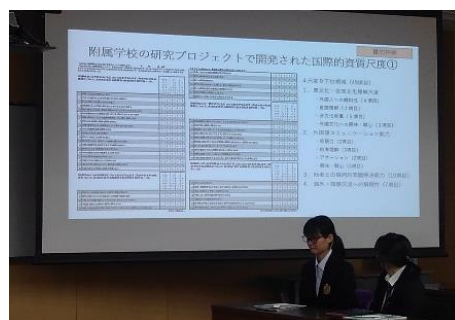
- ・海外からの訪問がきっかけで、校内でタイ留学事業を始め、年に数名が海外在住の卒業生を訪問した。
- ・文部科学省の「トビタテ！留学 JAPAN」を利用し、筑波大留学生などからつながった、タイやチェコを訪れた。盲学校へ行くものと普通校へ行く（インクルーシブ）ものの2種類がある。
- ・「トビタテ」では、学ぶものについては生徒たちが自分で決め、語学力以上に大切なものを育てるところが、視覚特別支援の生徒に合ったスタイルである。
- ・事前準備として、Skypeなどで現地語の講座を受けた。また、自分の学校紹介動画を作った。
- ・留学中はアンバサダーとして、日本の何を伝えたいのかということを意識し、留学後はエヴァンジェリストとして成果を発表し、次に参加する生徒に伝えていく。積極性や行動力が身についたと言える。



③ グローバル教育の効果検討（質的評価と量的評価の混合による評価の実践例の紹介）

飯田順子（附属学校教育局）

- ・予算獲得のためには評価も必要であり、附属学校研究プロジェクトとして、国際的資質尺度の短縮版アンケートを事前事後に行った。
- ・「異文化肯定意識」「国際理解における他者理解」「国際的事象の知識・スキル」「自国文化への理解・尊重」の4項目があり、自由記述もカテゴリー（大小）にまとめている。
- ・附属駒場の台湾研修を例に、具体的な数値を用いて説明があった。
- ・今後の課題としては、紙ではなく web 上で入力して自動計算でデータ化したい。



4. 事後アンケートの結果

毎年、参加者に対してアンケートを実施している。令和元年度は、前年のアンケート結果を反映させ、多くの附属学校教員が発表し、多くの参加者が質疑応答に参加できるように、全体会の後に分科会を開催する新たな形式を導入した。それに対するアンケートの結果は以下のとおりである。

(1) 本日の研究発表会の全体会について、感想、ご意見等をお書き下さい。

- 大変大きな実践であり、書籍化してほしい。
- テーマを中心として、様々な側面からお話が聞けて、非常によくわかった。(この共同生活の具体面や目的) また、このようなプログラムの準備はとても大変だと思うが、その立ち上げのステップも細かく知りたかった。
- 共同生活の意義・目的がよくわかりました。様々な人と生活して、お互いの考えがわかる良い「場」となっている。
- 黒姫、三浦共同生活を行う意義、重要性を実感しました。(生徒のため、教員のため) 参加者 OG 水江さんの話が聞けたことはとても良かったです。附属学校間の交流を図るととても良い取り組みであると改めて思いました。これからより良い取り組みへと発展してほしいと思います。一方で、この取り組み以外にも附属学校間の交流をする事業があっても良いと思いました。また、このような交流事業を1つのモデルとして各都道府県に伝え、特別支援教育の理解を深める一助とするのもありかと思いました。
- 第1部について、5年間の積み重ね、実績がよくわかりました。ぜひ改善をしながら継続していただければと思います。外への発信も重要な課題だと思います。
- 体験した生徒であった水江さんのお売れ善我文字の大きさ、色、出すタイミング、視覚データ(写真)を考慮しており、大変わかりやすかった。一方で(健常者と思われる)ほかの発表者の中には細かい文字がスクリーンにびっしりで、わかりやすくする工夫に欠けている方もおられた。こう考えると何が障害者というのは一律には決められない。自分の得意なところを活かすことが大切だというメッセージが感じられた。
- 水江さんのお話を伺い、共同生活を体験した上での考えは、将来的に子どもたちに持ってほしい考えの1つだと感じていたものであり、この交流の大きな成果ではないかと感じました。しかし、この考えを持つのはただ交流を行えばよいということではなく、担当された先生方が、子どもたちを信じて待ち、子どもたちが自主的にできる環境や場面設定があったからこそだと思います。特に実行委員会に参加した子どもたちにとって、障害の種や有無にかかわらず伝えることの難しさ、大変さを感じつつも、達成感があったかと思います。この共同学習は、交流および共同学習を行っているほかの学校にとっても有意義な内容ではないかと思いました。
- 筑波型インクルーシブを振り返るテーマはとても良かった。
- 共同生活の5年間が統括されて、改めてその実施している意味が確認できてよかったと思います。
- 黒姫、三浦の発表、その後の分科会も良かったです。
- 共同生活の意義や内容がよくわかり大変有意義でした。
- 様子がよくわかってわかりやすいものでした。共同生活後の生徒同士、学校同士の交流や附属学校以外の学校への広がりなど検討してください。

- 共同生活について、様々な視点から成果や反省点を知ることができました。学校単独では見えてこない他の障害種の視点を知る機会は教員、生徒共に大切にしていきたいと思います。
- 発表者数が多く、共通する意見も多かったので、もう少し少なくして意見交換する時間をとった方がいいと思いました。
- 黒姫共同生活の様子がわかって良かったです。（三浦海岸に 1 度引率しただけだったので）特別支援からの話、大変勉強になりました。普通附属からも話が聞けたら良かったです。
- 附属学校群ならではの事例をお話いただき大変興味深いものでした。本校でも特別支援学校との連携を考えているのですがなかなかうまくいかず、参考にさせていただきたいです。
- 他附属を知るうえで、有効な会であった。充実した時間となった。参加者が少なくてもったいない。共同生活の有効性が具体的に理解できた。
- 黒姫、三浦の共同生活についてのシンポジウムでは様々な立場の先生方のお話を聞くことができ、この活動の意義を知ることができました。さらに、参加する側の生徒の考えを聞くこともでき、主催者側、参加者側両方の気づきも知ることができました。
- 共同生活シンポジウム良かった。水江さんのスピーチが特に心に響きました。スピーチの最後、石田さんの言葉が広がりを持つといいですね。共同生活経験者のその後の大学や社会での活動報告を聞きたいですね。附属高校の総合的な探求の時間の発表でも優秀レポートに選ばれていました。

(2) 本日の研究発表会の参加された分科会について、感想、ご意見等をお書き下さい。

【分科会 1】

- 面白い教材、指導法がたくさん提示され、大変刺激になりました。
- ワークショップを中心とした分科会は、発表者側にとってもとても良かったと思います。参加して下さった先生方からもご意見をいただけて真に相互的な協議ができたと思います。
- 音楽って人を開放、そして解放してくれるのでいいですね。すっかり元気になりました。

【分科会 2】

- まず、6 人の発表者のライトニングトークがあった後に、部屋を分けるという取り組みが素晴らしかった。（発表内容が書面以上により具体的に分かった）ICT 活用の話題は、今まさに問われているものだと思います。各実践はとても有機的なもので、すぐに取り込みたいものが多くあり、勉強になりました。
- 6 人の発表者のライトニングトークでそれぞれの発表の内容が紹介されとてもわかりやすかった。すばらしいアイデアだと思います。それぞれのご発表について、内容が多く、すべてを紹介するには時間が短い印象を受けました。
- ICT を活用した様々な実践を聞くことができ、大変勉強になりました。ICT に関しては、私たち教員よりも子どもたちの方が上手に活用できていると思います。子どもと一緒に学ぶ際、より分かりやすい教材というものをしっかり精査する必要があると感じました。今和泉先生がおっしゃられた ICT を楽しんで活用するというのが、今後

の学習に通じていくのではないかと感じました。ICT は手段であり、それを活用するとより便利になるということに子どもたちは十分理解できていると思うので、それらをいかに学習に落とし込んでいくのか、しっかり考えていきたいと思います。

- 各附属の取り組みを ICT ということでまとめて発表する場合は貴重だった。
- 興味深い実践例やアクセシビリティ、またその利用の難しいケースがある場合などを知ることができ、有意義でした。もう少し時間的余裕があると良かったと思います。
(が、半日になったのはよかったと思います。内容を絞る方面で)
- 動画、アクセシビリティ等学ぶことができた。特別支援教育の中で、プログラミング教育や1人1台の端末の活用について、もう少し取り組みを知りたかった。
- 各発表をもう少し詳しく聞きたかったです。
- ICT 活用について新たな知識を得ることができた。少しでも活用したいと思います。
- 分科会形式で興味関心のあるものが見られてよかった。他分科会の資料等を見たい。
ダウンロードできるシステムがあるとありがたいです。
- スマホや安価な材料から作られる教材開発など参考にさせていただきたいと思います。
- 分科会の中でもっと意見交換ができるように時間の余裕が欲しかったです。
- 資料の URL があるので、PC 等にダウンロードできて助かります。次年度も継続していただけるとありがたいです。
- ICT 教育の” おもしろさ ” と苦勞をいただきました。お三方の話する領域がバランスよく、気になることにまんべんなくスポットが当てられていました。
- 本校でも ICT の活用を推進していますが、使い方は限られており、新たな使用方法や聴覚障害のある生徒にも生かせる実践を聞くことができ、大変参考になりました。

【分科会 3】

- グローバル教育の進め方(ラウンドテーブル形式による課題の検討):筑波の学校は積極的に国際教育を進めているのを知っていたので、どのように進められているのかに興味・関心があったため参加した。高3生徒の発表もあり生徒の視点も得られてよかった。視覚障害があると特に難しいことも分かった。
- 「グローバル教育」って何?どう実現・推進できるのか」に興味をもって参加しました。参加者のコメントを聞き、生徒の発表を聞いて、いろいろなヒントをもらいました。とても役に立ちました。ありがとうございます。
- 特別支援学校のトビタテ!で留学した生徒さん2人の発表が具体性があり興味深かった。そのような発表形式にされた担当の佐藤先生も素晴らしかった。質疑応答がない時のことを考えて、「逆に質問」という形式をとられた点も参考になった。
- グローバル教育に熱心に取り組んでおられる先生方の具体的なお話が参考になりました。また他校の情報も聞けたのが良かったです。
- 日常とは違う脳の部分を刺激した気がする。
- 少人数で複数の方の意見を聞くことができ、勉強になりました。

Ⅱ 筑波大学附属学校教育局・附属学校について

1 附属学校教育局（教育長 茂呂 雄二）

○主要沿革

- 昭和 53 年 4 月 国立学校設置法施行規則の一部改正により学校教育部設置
教育開発研究、心身障害教育研究、教育相談研究及び教職教育研究の各分野と教育資料部門により発足
- 平成元年 4 月 学校教育部の研究分野は学校教育研究分野に統合。夜間修士課程設置に伴い、学校教育部は教育研究科カウンセリング専攻と連携し、心理・心身障害教育相談を実施
- 平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学が附属学校教育局設置
- 平成 19 年 4 月 特別支援教育の実施により附属学校の名称を一部変更

○設置目的

附属学校教育局は、幼児・児童又は生徒の教育並びに保育に関する実際的研究を行うとともに、学長の監督の下に、附属学校（11 校）の運営に関する校務について統括及び調整を行う。

○機能

- （1）附属学校を研究の場とし、学校教育に関する実際的なグループ研究を行う（研究センター的機能）
- （2）附属学校の運営に関する校務について統括及び調整を行う（統括・調整機能）
- （3）教育相談を実施する（相談室機能）
- （4）研究成果を広く社会に公開する（広報機能）
- （5）教育実習の調整及び支援を行う（教育実習機能）
- （6）附属学校教員のための研修の企画・実施（研修機能）

○研究プロジェクト：平成 30 年度実施の研究プロジェクト

- ・プロジェクト 1
交流及び共同学習の実践と評価に関する心理学的研究
- ・プロジェクト 2
学校教育における ICT 活用に関する研究 2
- ・プロジェクト 3
演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創

2 附属学校の主要な沿革

① 附属小学校（校長 甲斐 雄一郎）

児童総定員：768 名（24 学級）

- 明治 6 年 1 月 師範学校練習小学校として創設
- 明治 35 年 3 月 東京高等師範学校附属小学校と改称
- 昭和 24 年 5 月 東京教育大学附属小学校と改称
- 昭和 53 年 4 月 筑波大学附属小学校となる
- 平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属小学校となる

② 附属中学校（校長 野津 有司）

生徒総定員：600名（15学級）

明治21年9月 高等師範学校の尋常中学校として創設

明治35年3月 東京高等師範学校附属中学校と改称

昭和24年5月 東京教育大学附属中学校と改称

昭和53年4月 筑波大学附属中学校となる

平成16年4月 国立大学法人筑波大学附属中学校となる

③ 附属高等学校（校長 大川 一郎）

生徒総定員：720名（18学級）

明治21年9月 高等師範学校の尋常中学校として創設

明治35年3月 東京高等師範学校附属中学校と改称

昭和24年5月 東京教育大学附属高等学校と改称

昭和53年4月 筑波大学附属高等学校となる

平成16年4月 国立大学法人筑波大学附属高等学校となる

平成26年4月 「スーパーグローバルハイスクール」幹事校に指定

④ 附属駒場中学校・附属駒場高等学校（校長 林 久喜）

生徒総定員：中学校 360名（9学級） 高等学校 480名（12学級）

昭和22年5月 東京農業教育専門学校附属中学校として創設

昭和24年5月 東京教育大学東京農業教育専門学校附属中学校と改称

昭和25年4月 同附属高等学校開校 農業科・普通科各1学級

昭和27年4月 東京教育大学附属駒場中学校、同附属駒場高等学校と改称

昭和37年4月 高等学校の農業科を普通科に転換

昭和53年4月 筑波大学附属駒場中学校、同附属駒場高等学校となる

平成14年4月 「スーパーサイエンスハイスクール」研究開発校に指定

平成16年4月 国立大学法人筑波大学駒場中学校、同附属駒場高等学校となる

⑤ 附属坂戸高等学校（校長 田村 憲司）

生徒総定員：480名（12学級）

昭和21年4月 組合立坂戸実務学校・坂戸実修女学校として創設

昭和23年6月 組合立坂戸高等学校と改称

昭和28年8月 東京教育大学附属坂戸高等学校と改称

昭和53年4月 筑波大学附属坂戸高等学校となる

平成6年4月 総合学科としての「総合科学科」に改編

平成16年4月 国立大学法人筑波大学附属坂戸高等学校となる

平成26年4月 「スーパーグローバルハイスクール」に指定

平成29年2月 「国際バカロレア認定校」

令和元年度 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援
事業実施拠点校となる

⑥ 附属視覚特別支援学校（校長 柿澤 敏文）

幼児・児童・生徒総定員：252名（37学級）
明治8年5月 楽善会が発足
明治13年1月 楽善会訓盲院が事業開始
明治17年5月 楽善会訓盲哑院と改称
明治18年11月 文部省直轄学校となる
明治20年10月 東京盲哑学校と改称
明治42年4月 東京盲学校と改称
昭和24年5月 国立盲教育学校附属盲学校と改称
昭和25年4月 東京教育大学国立盲教育学校附属盲学校と改称
昭和48年4月 東京教育大学附属盲学校となる
昭和53年4月 筑波大学附属盲学校となる
平成16年4月 国立大学法人筑波大学附属盲学校となる
平成19年4月 国立大学法人筑波大学附属視覚特別支援学校となる

⑦ 附属聴覚特別支援学校（校長 鄭 仁豪）

幼児・児童・生徒総定員：272名（40学級）
明治8年5月 楽善会が発足
明治9年3月 楽善会が訓盲所設立の許可を得る
明治13年1月 訓盲所を楽善会訓盲院と改称し、開校事業を開始
明治17年5月 校名を楽善会訓盲哑院と改称
明治18年11月 文部省直轄学校となる
明治20年10月 東京盲哑学校と改称
明治43年4月 東京聾哑学校と改称
昭和21年 東京聾哑学校が千葉県市川市国府台に移転
昭和22年 東京聾哑学校を東京聾学校と改称
昭和24年5月 国立聾教育学校附属聾学校と改称
昭和25年4月 東京教育大学国立ろう教育学校附属ろう学校と改称
昭和48年4月 東京教育大学附属聾学校と改称
昭和53年4月 筑波大学附属聾学校となる
平成16年4月 国立大学法人筑波大学附属聾学校となる
平成19年4月 国立大学法人筑波大学附属聴覚特別支援学校となる

⑧ 附属大塚特別支援学校（校長 柘植 雅義）

幼児・児童・生徒総定員：76名（13学級）
明治41年10月 東京高等師範学校附属小学校に補助学級設置
昭和19年 太平洋戦争の激化に伴い、一時閉級
昭和27年9月 東京教育大学附属小学校特殊学級として再開
昭和35年4月 附属小学校第五部（二学級）及び附属中学校特殊学級（二学級）を母体として養護学校が許可される
昭和37年4月 高等部新設
昭和38年4月 幼稚部新設
昭和48年4月 東京教育大学附属大塚養護学校と改称

昭和 53 年 4 月 筑波大学附属大塚養護学校となる
平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属大塚養護学校となる
平成 19 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属大塚特別支援学校となる

⑨ 附属桐が丘特別支援学校（校長 下山 直人）

児童・生徒総定員：141名（31学級）

昭和 27 年 9 月 整枝療護園からの要請で、東京教育大学附属小学校から2名の
講師を派遣し園児の教育を開始
昭和 29 年 4 月 東京教育大学附属小学校に肢体不自由児学級を新設
昭和 33 年 4 月 東京教育大学教育学部附属養護学校として開校
昭和 35 年 4 月 東京教育大学教育学部附属桐が丘養護学校と改称
昭和 48 年 4 月 東京教育大学附属桐が丘養護学校と改称
昭和 53 年 4 月 筑波大学附属桐が丘養護学校となる
平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属桐が丘養護学校となる
平成 19 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属桐が丘特別支援学校となる

⑩ 附属久里浜特別支援学校（校長 西垣 昌欣）

幼児・児童総定員：54名（18学級）

昭和 48 年 9 月 国立学校設置法の一部を改正する法律が公布され、
国立久里浜養護学校設置
平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属久里浜養護学校となる
平成 19 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属久里浜特別支援学校となる

附属学校教育局 プロジェクト研究 1

1. 研究テーマ

『交流及び共同学習の実践と評価に関する心理学的研究』

2. 研究代表者

小島道生・下山直人(附属学校教育局)

3. 研究構成員

白坂洋一、粕谷昌良、富田瑞枝、弥述浩史、森本隆史、加藤宜行（附属小学校）

中村昌子、石黒友一（附属中学校）

森嶋政晴（附属視覚特別支援学校）

居林弘和（附属大塚特別支援学校）

石田周子（附属桐が丘特別支援学校）

4. 研究目的

交流及び共同学習の実践について、これまでの実践を評価するとともに、新たな評価方法の開発を試みる。また、交流及び共同学習における効果的な支援の在り方について追究する。

5. 研究成果の概要

本年度は、研究テーマと方法の具体的な検討をメール会議及び研究員との打ち合わせにより行った。附属学校における交流及び共同学習の実践にかかわる評価を進めている途中であり、次年度に研究成果をまとめる予定である。具体的な方法として、各学校の実情なども考慮して質的研究と量的研究を展開し、多面的な評価を試みていく予定である。

6. 今年度の活動

・メール会議及び研究員との打ち合わせにより、研究内容の具体的検討と次年度以降の研究の方向性などについて検討を行った。また、交流及び共同学習にかかわる研究について文献検討を進め、論文執筆を進めた。

（文責；小島道生・下山直人）

附属学校教育局 プロジェクト研究2

1. 研究テーマ

『演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創』

2. 研究代表者

茂呂 雄二（附属学校教育局）

3. 研究構成員(今年度)（以下、敬称略）

笠原 壮史（附属小学校）

関谷 文宏、中島 真紀子、石黒 友一（附属中学校）

岩田 光弘、小松 俊介、岡部 玉枝（附属高等学校）

森 大徳、平田 知之（附属駒場中・高等学校）

福田 美紀（附属坂戸高等学校）

皆川 あかり（附属視覚特別支援学校）

若井 広太郎、根岸 由香（附属大塚特別支援学校）

小藺 慶子、大川原 恒（附属桐が丘特別支援学校）

4. 研究目的

本研究プロジェクトは、現在、学習心理学・発達心理学の領域で注目されている、パフォーマンスアプローチに基づいて、①パフォーマンス・ベース・アプローチの整備、②附属における教育方法の革新／教員のマインドの改革／新しい危機管理研修方法の提案、③成果の出版と発信の3点を目指すものである。

5. 研究成果の概要

今年度は、上記研究目的のうち①パフォーマンス・ベース・アプローチの整備、②附属における教育方法の革新について検討した。

①に関しては、外部の識者を招いて、パフォーマンスアプローチの意味と可能性を確認した。2人の海外のゲストと国内ゲストを招き、パフォーマンスに関する考え方を聞きながら、一緒にインプロゲーム、演劇ワークをする機会をえた。招聘したゲスト以下の通りである。

- ・ Raquell Holmes 先生（米国カリフォルニア、STEAM 教育、ImproveScience 主催者）

2019 年 9 月 28 日（土曜日）14:00-17:00、於：東京キャンパス 431 室

2019 年 11 月 4 日（月曜日）14:00-17:00、於：東京キャンパス 337 室

- ・ Nicola Pauling 先生（ニュージーランド、インプロによる発達支援、Voice Art 主催者）

- ・ 赤木和重先生（神戸大学発達科学部、特別支援教育）

2020 年 2 月 24 日（月曜日）14:00-17:00、於：東京キャンパス 337 室

また、パフォーマンスに関する情報の収集と共有を目指して、Newman & Holzman (1996). Unscientific Psychology. Praeger.の読書会を2回開催した。

②に関しては、大塚特別支援学校幼稚部の取り組みについて検討、議論する予定である。

・大塚特別支援学校幼稚部

2020年3月14日（土曜日）13:00-16:00、於：大塚特別支援学校

上記の研究を通して、インプロを代表とするパフォーマンス遊びが、科学技術の学習や STEAM 学習等の幅広い教科内容にも、同時に特別支援における発達障害支援にも適用可能であることを確認した。

パフォーマンスアプローチの基礎となる、批判的な心理学の哲学と、その重要性を参加者で共有することができた。

同時に、附属学校において、パフォーマンスを用いた具体的な支援技法を一部であるが、整理できた。

これらの成果をもとに、令和2年2月22日開催の附属学校教育局研究発表会における分科会で、参加者とともに、(1)パフォーマンス心理学の考え方の共有、(2)実際のインプロ遊びの体験、(3)附属大塚特別支援学校幼稚部の音楽遊びの体験と批評をおこなった。

6. 今年度の活動

2019年9月28日（土曜日）14:00-17:00、於：東京キャンパス 431 室

Raquell Holmes 先生（米国カリフォルニア、STEAM 教育、ImproveScience 主催者）

2019年11月4日（月曜日）14:00-17:00、於：東京キャンパス 337 室

Nicola Pauling 先生（ニュージーランド、インプロによる発達支援、Voice Art 主催者）

2019年12月8日（土曜日）於：東京キャンパス 337 室

Unscientific Psychology 読書会①

2020年2月24日（月曜日）14:00-17:00、於：東京キャンパス 337 室

赤木和重先生（神戸大学発達科学部、特別支援教育）

2020年3月8日（土曜日）於：東京キャンパス 337 室

Unscientific Psychology 読書会②

2020年3月14日（土曜日）13:00-16:00、於：大塚特別支援学校音楽室

大塚特別支援学校幼稚部の実践に関する協議会

（文責；茂呂雄二）

附属学校教育局 プロジェクト研究3

1. 研究テーマ

『中高生のインターネット依存の現状と支援に関する研究』

2. 研究代表者

原田 隆之（筑波大学人間系・附属学校教育局）

3. 研究構成員(今年度)（以下、敬称略）

五味 貴久子、山形 友広、道幸 玲奈（附属中学校）

早貸 千代子（附属駒場中・高等学校）

河野 文子、白石 利夫（附属桐が丘特別支援学校）

三原 聡子（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

4. 研究目的

各附属学校においてインターネット依存（ゲーム障害）傾向のある生徒の実態を調査するとともに、インターネット依存に陥った際に、どのような指導や援助が適切であるか、家族がどのように関わったらよいかなどについて明らかにする。

5. 研究成果の概要

研究会を実施し、研究目的や計画を共有したのち、実施方法や実施内容について意見交換を行った。今後、附属学校での質問紙調査を実施する予定である。

6. 今年度の活動

- ・研究会の開催（令和元年9月27日）
- ・附属学校との研究の打ち合わせ（令和2年3月12日）
- ・附属学校での質問紙調査の実施（令和2年3月～）

（文責；原田隆之）

附属学校教育局 プロジェクト研究 4

1. 研究テーマ

『ICT を活用した授業実践の共有と公開

～授業実践を持ち寄って、筑波の附属から普段使いの ICT 活用法を発信しよう～』

2. 研究代表者

雷坂 浩之（附属学校教育局）、白石 利夫（附属桐が丘）、植村 徹（附属駒場）

3. 研究構成員

志田 正訓、辻 健（附属小学校）

齋藤 正義、山内 廉（附属中学校）

今和泉 卓也、阪田 卓洋、渡邊 隆昌（附属駒場中・高等学校）

井上 卓也（附属坂戸高等学校）

内田 智也、佐藤 北斗（附属視覚特別支援学校）

宇佐美 太郎、佐藤 知洋（附属大塚特別支援学校）

向山 勝郎、古山 貴仁、齋藤 豊、大川原 恒、山浦 和久、青山 妙子、加藤 隆芳
（附属桐が丘特別支援学校）

4. 研究目的

各附属学校での様々な実践は、これまでの他のプロジェクト研究などをみても、普通附属の先進的な実践が特別支援教育での指導の参考になったり、附属特別支援学校での個に応じた ICT を活用した教育実践が普通附属での活用の参考になったりするなど、お互いに共有することはとても意味のあることと考えられる。そこで、本研究プロジェクトでは、互いの実践を共有するだけでなく、それぞれの専門性を生かして検討を加え、改善を進める。そして、共有した授業実践もとにワークショップ等のイベントを行い、外部に発信するとともに、広く成果交流を図り、さらに実践を深めていくことを目指す。

5. 研究成果の概要

- ・ 本学附属学校群各校の ICT 教育の現状（情報教育に必要なネットワーク環境、端末の整備状況などの教育環境、担当教員の資質など）が明確になった。
- ・ 特別支援学校における障害種ごとの情報アクセシビリティの課題や配慮事項等を共有することができた。
- ・ 附属久里浜と附属聴覚を除く各校の ICT 教育の実践内容の共有が図れた。

6. 今年度の活動

- ・ 引き続き担当者間での交流や情報交換の場を設ける。
- ・ 引き続き各校の ICT 教育の実践内容について共有を図る。
- ・ 各校の実践内容の中から優れた実践を精選し、発信する場検討する。
- ・ 学校種を超えた実践の共有と活用の方法を検討する。
- ・ 各校の担当者が相互に出前授業等を行い、実践の共有と活用の可能性を検証する。
- ・ ネットワーク環境や端末の整備に向けた課題（予算や人員配置）の解決を図る。

（文責：雷坂浩之、白石利夫、植村徹）

Ⅳ 附属学校の研究概要

附属小学校の研究概要

～「美意識」を育てる～

1. はじめに

附属小学校では、昨年度までの4年間、研究主題『『きめる』学び』を掲げ、理論的・実践的研究に取り組んできた。研究では、授業のなかで子ども自身が何かを「きめる」ことを通して「知的にたくましい子ども」の育成を目指した。研究を通して得た知見は以下の通りである。

- (1) 子どもが何かを「きめる」とき、「感覚的」にきめるときと「論理的」にきめるときがある。
- (2) 「感覚的」にきめることと「論理的」にきめることを往還させることで、知的たくましさによりよく育つ。
- (3) 知的たくましさによりよく育てるために、「価値ある遠回り」も有効に働く。
- (4) 「きめる」学びには、学ぶ様相として4つの要素（①自分の経験やそれまで身に付けてきた知識・技能を生かして「きめる」、②自分事として「きめる」、③自分のこだわりをもって「きめる」、④自分が「きめた」学びを実感する）が認められた。

以上、子ども自身が「きめる」ことを授業に位置づけることで、知的にたくましい子どもの育成につながるということが明らかになったのである。

その一方で、課題も明らかとなった。

例えば、道徳の授業において、子どもが何らかの価値について考え、自らの立場を「きめる」場面がある。その際、一般的に考えてよりよい行いや考えが明らかになるとき、自らに問いかけることなく、建て前としてよりよい立場に「きめる」ことはないだろうか。頭ではよりよい行いや考えをすべきということはきめられるが、実生活においてはそのことがまったく意識されていないとしたら、「きめる」学びを指向した授業は、子どもの育ちを伴わない空虚なものになってしまう。

長い人生において、さまざまな局面で自分が「きめる」ことは、そしてその資質を備えることは重要なことである。その際、知的な判断を伴うことも重要なことである。しかし、いくら知的にたくましく「きめる」ことができても、それを間違った方向に作用させることは、当然望ましくないのである。

「知的にたくましい」「きめる」にはよりよい方向性が必要なのである。

本年度、新しい研究に舵を切る際、上に挙げた『『きめる』学び』研究の成果や課題に立脚することは必然である。

2. 新しい研究主題『『美意識』を育てる』

本年度（令和元年度）、附属小学校の新しい研究主題として、『『美意識』を育てる』を掲げた。

「美意識」を育てる

人生 100 年時代と言われる。100 年間に及ぶ自らの人生を幸せに生き抜くために必要な資質・能力を育てることが大切である。価値観が多様化している昨今だが、今後はますます多様化が進むと予測される。

そのような時代にあって、個人個人は何をもとに自らの価値観をつくりあげていくのだろうか。もちろん、価値観を形成していくには、相応の知識も必要だし、その知識をもとにして思考、判断することが大切である。そのとき、学校教育が果たす役割は非常に大きなものである。だから、いま学校で 3 つの資質・能力を育てる必要性が叫ばれている。学校には共に学ぶ仲間がいる。先生がいる。いろいろな人との交わりを通して 3 つの資質・能力を育てるところに学校のよさや強みがある。

しかし、3 つの資質・能力を育てるといえるとき、単に多くの知識を覚えられればよいわけではないし、先の道徳の授業の例で示したとおり、空虚な思考力を育てるのも間違いである。これらは、言わば「見せかけの資質・能力」とも表現できるものである。

そうではなく、いわゆる資質・能力を支えるその子なりの考えの源、それもよりよいものを指向する源が必要だと、私たちは考えた。

それを本研究では「美意識」と呼ぶことにしたのである。

「美意識」とは、その個人の中にある固有のものであるから、人それぞれ違ったものであろう。それこそ多様性があるのだ。その個人の「美意識」に従って、知識を生かし、思考・判断し、その人らしい生き方を決めていく。これが、多様な価値観が存在する新しい時代の生き方なのではないだろうか。「美意識」がその人の人生を方向付けていくという考え方だ。

だから、本研究では「美意識」という言葉を研究の柱として据えたのである。

3. 「美意識」とは何か？

本研究第一年次の段階では、「美意識」について次のように定義づけている。

「美意識」とは、資質・能力を発揮する方向を決める源になるものである。それは、「共に幸せに生きること」を目指すための「自分らしいこだわり」であり、育まれていくものである。

「美意識」を「資質・能力を発揮する方向を決める源になる」と定義づけたのは、単に資質・能力を伸ばすことのみを一義的に指向した教育をしたところで、子どもがその資質・能力を間違った方向に発揮してしまえば本末転倒であり、小学校教育で育まれた資質・能力を生涯にわたってよりよい方向に発揮されることが望まれることを含意しているためである。

「『共に幸せに生きること』を目指す」とは、そもそも「美意識」は、前述したとおり、その個人の中にある固有のものである。そのために、誤った解釈をすれば、自分の「美意識」に従うことが単なる身勝手や自惚れ、独りよがりや反社会的になってしまうことも考えられる。そうではなく、個の中にある固有の「美意識」は、前提として、社会や世界の人々、または自然などと共に幸せに生きていくことを目指したものでなくてはならないのである。

「自分らしいこだわり」とは、個の中にある固有の「美意識」が向いている方向性のことである。元来「こだわり」という言葉は、「なんくせをつける」とか「文句をつけること」

という意味で使われてきたが、近年では「こだわりの逸品」などというように、肯定的な意味においても使われている。本研究における「こだわり」とは、その人らしい、その子らしい「思い入れをもった」あるいは「思い入れを伴った」考え方や行いのことを指している。その人らしい、その子らしいというのが、「美意識」が向いている方向性と捉えることができる。

前掲した「美意識」の定義の文末は、「育まれていくもの」で結ばれている。つまり、私たちは、初等教育期において子どもの「美意識」は「育まれる」、つまり変容させることができるものとして捉えているのである。「美意識」は、生得的にあるものではなく、環境や教育によって変容する可変性のものであることを示しているのだ。

4. 本研究の目的

本研究の目的は以下のとおりである。

初等教育において、子どもの「美意識」をどのように捉え、どのように育むことができるかを探るとともに、「美意識」をよりよく育むためのカリキュラムモデル構創出を試みることを本研究の目的とする。

本研究の目的に、「子どもの『美意識』を捉える」とある。これは、各教科や領域がもつ特性に鑑みて授業の中で育まれる「美意識」と位置づけられるものである。従って、授業を構築する際に「美意識」という概念を持ち込むことで、授業がどのように改善されるのか、研究の主眼となる。

また、「『美意識』をよりよく育むためのカリキュラム構築」とは、「美意識」を育むために各教科や領域における学習内容を吟味し、配列を試みる。

資質・能力ベースによって書き換えられた新学習指導要領だが、学習内容については従前の学習指導要領と大きな変化がない。本研究では、「美意識」が支えとなる資質・能力をよりよく育むために、真に必要な学習内容は何かを抽出し、構築、配列することを目指している。

5. 本研究で目指す子ども像

本研究の主眼は、子どもの「美意識」を育てることにある。ここで、子どもがどのように育っていったほしいのか、その具体の姿を挙げたい。実際の授業構築に資すると考えられるからである。

目指す子ども像は、以下のとおりである。

自らの「美意識」に素直に向き合い、追究したいことを見いだしたり、正しいと思ったことを実行したり、よいと思ったものを取り入れたりすることを通して、新たな価値を共に創造することを楽しみ、自らの「美意識」を成長させようとする子ども。

子どもが、その段階でもちあわせている「美意識」に素直に向き合うことで、その子なりの物事の捉え方をする。その上で、追究したいことを見いだしたり、正しいと思ったことを実行したり、よいと思ったものを取り入れたりすることを重視したい。こうすることが、その子なりの「美意識」を生かすことにつながるからだ。

また、以上のような過程を経て、友達と交わりながら新たな価値を共に創造することを重視する。友達と交わりながら追究することは、その子の「美意識」を更新させることに

つながる。このことは学校教育における大きな価値と言えるだろう。身勝手や自惚れ、独りよがりな「美意識」に陥らないようにするために「新たな価値を共に創造する」ということが重要になるのだ。

本研究においては、学校でのあらゆる教育活動を通して、自らが自身の「美意識」を成長させていこうとする子どもを育てたいと考えている。

6. 研究の内容

前掲した本研究の目的に鑑み、研究の内容を以下のようにする。

- (1) 各教科や領域が固有にもつ「美意識」について授業の具体、子どもの具体的な姿を通して明らかにする。
- (2) 授業など教育活動を通して、子どもの「美意識」がどのように育まれるかを明らかにする。
- (3) 「美意識」がよりよく育まれるためのカリキュラムモデル創出を試みる。

7. 研究の方法

研究を進める際、それぞれの研究内容について以下のような**方法**で取り組むことにする。

- (1) 各教科や領域が固有にもつ「美意識」について授業の具体、子どもの具体的な姿を通して明らかにする。
- (2) 授業など教育活動を通して、子どもの「美意識」がどのように育まれるかを明らかにする。

上記(1)及び(2)の研究内容については、各教科や領域において、日常的に授業や学習活動を構築する際に「美意識」というキーワードを念頭に置いて授業に臨むようにする。そして実際に授業を行い、記録と考察を行う。

また、定期的に行われる校内研究会において、各教科や領域の研究授業を実施する。その際、上記(1)「各教科や領域が固有にもつ『美意識』」とは何か、また上記(2)「授業などを通して育まれる『美意識』」をどのように想定するのか、授業者自身の見解を指導案に明記することにする。授業後の協議会では、授業者が想定したことが実現したか、あるいは妥当かなどを検討していく。

- (3) 「美意識」がよりよく育まれるためのカリキュラムモデル創出を試みる。

本校は、令和2年度より4年間の計画で文部科学省による「研究開発学校」の指定を受けている。これは、主として各教科等の内容の構造化等による資質・能力の育成に関する研究開発を行うもので、現行の学習指導要領による時間的な、あるいは内容的な制約を受けないで研究に当たることが可能となる。

カリキュラムモデル創出に際しては、以下の段階を経て行うように計画している。

- ① 各教科等の編成原理の問い直し
- ② ①に基づく、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出
- ③ ①②に基づく、各教科等における個別的な知識の精選
- ④ 指導内容の構造化（各教科等内における領域編成の見直し、指導内容の配当学年、指導順序の見直しを含む）

8. 研究の計画

本研究は、テーマを「『美意識』を育てる」と設定し、さらに以下のように研究のサブタイトルを付記して、各年次の研究を推進する。

第1年次 資質・能力を支える「美意識」

第2年次 「美意識」を育てる授業と指導法（仮）

第3年次 教科で育てる「美意識」と指導内容の構造化（仮）

第4年次 「美意識」を育てる美しいカリキュラム（仮）

9. 第1年次の研究、そして第2年次に向けて

第1年次研究では、上記の研究計画を立案することに多くの時間を割いた。また立案に寄与するべく校内研究会において研究授業を行った。研究授業を行ったのは、国語科、算数科、理科、音楽科、道徳科である。

第1年次の成果としては、「美意識」研究の計画を立てたこと、文部科学省による「研究開発学校」の指定内定を受けたこと、研究授業を通して、各教科における子どもに育てるべき「美意識」を明らかにしようという試みをスタートできたことである。

第2年次研究では、研究授業を通じた実践的研究を進め、子どもに「美意識」を育てるための指導法を探りつつ、各教科等の編成原理の問い直しなどを行い、「美しいカリキュラム」づくりの基礎づくりを指向する。

（文責）高倉弘光

附属中学校の研究概要

1. はじめに

附属中学校では、大塚小中高と大学との連携に基づくカリキュラム開発と実践プログラムの作成を視野に入れ、教科ごとに教材や学習指導法の開発を中心に研究を行っている。

本年度は、大塚地区の3校と大学とからなる「四校研」として、グローバルな素養を育てる小中高一貫カリキュラムを作成するための研究を各教科等で行い、社会科、数学科、保健体育科などで、小中高合同研究発表会の実施等を行っている。

2. 教員研究会の実施

(1) 主旨と内容

教育活動の質の向上及びその成果の発表への準備を行う場として教員研究会を定期的に実施している（原則：各週月曜日）。内容は、恒常的に行うものとして各年度の研究課題、研究協議会開催に向けての準備（発表内容・運営方法の検討）、学校評価、校内授業研究会、救急救命訓練等である。その他には、学習支援を要する生徒の指導、いじめ問題に関する研修会、教育課程の編成や入試のあり方に関する検討会など、早急に対応しなければならない問題や中・長期的な課題などを扱っている。

(2) 本年度実績（全10回）

回	日付	研 究 会 の 内 容
1	4月15日	①今年度の研究課題／②研究・研修報告
	5月20日	四校研①（附属小）
2	6月 3日	①いじめ・保護者対応に関する新しい研究・実践 ～創造的ないじめ解消プログラムの実践へ～ ②特別の教科 道徳の指導の研究・実践
3	6月17日	①生徒指導に関する情報提供と共通理解 ②第1学年総合学習（探究学習）の実践
4	7月 1日	①救命講習会（協力：小石川消防署） ②安全点検の実施（保健委員会・防災検討委員会）
	8月30日	中高合同研究会
5	9月 9日	①全国学力学習状況調査・生徒質問紙の結果分析 ②第1学年総合学習（探究学習）の成果報告 ③教育課程研究（黒姫高原生活、富浦生活の反省）
6	10月 7日	研究協議会・全体会内容検討
	10月21日	四校研②（附属中）
7	10月28日	研究協議会の運営・発表内容（全体会・各教科）
8	11月18日	①研究協議会報告（各教科からの報告）②第2回四校研のまとめ ③来年度の教育課程

9	12月16日	学校評価
	1月20日	四校研③（附属高校）
10	2月10日	校内授業研究会（総合学習：研究授業および協議会）
11	3月9日	今年度の研究の課題のまとめ（各部局から）

3. 研究協議会の開催 令和元年11月9日（土）9:20～16:30

- (1) 全体会 「中学生と語る探究的な学び」
- (2) 公開授業と研究協議（各教科）

4. 校内の各部局での研究課題

- ① 教務部：入試の検討，防災に関する検討，校内情報管理システムの運用と改善
- ② 生徒部：生活指導，生徒会指導，クラブ活動に関する指導の検討
- ③ 研究部：学校全体の教育力を高めるための研究，新教育課程の編成
第三期中期目標（四校研）達成へ向けての研究

5. 各教科の研究課題

教科	平成31（令和元）年度の研究課題
国語科	新学習指導要領の施行を見据えた国語科授業実践の研究（2）
社会科	小中高一貫カリキュラムの作成（14）
数学科	数学的活動のさらなる充実を図るためのカリキュラム研究
理科	グローバルな素養を育てる理科の学習指導のあり方について（3）
音楽科	学校音楽の果たすべき役割と可能性（継続）
美術科	本校美術科カリキュラムの見直し（継続）
保健体育科	3年間を通じたカリキュラムの検討（継続）
技術科	情報モラルについての研究－技術に関わる倫理感や新しい発想を生み出
家庭科	食育：栄養バランスの整え方－10代からの食生活習慣について－（3）
英語科	新学習指導要領に対応した指導のあり方の研究（3）
学校保健	保健室の保健情報センター機能の充実

6. 総合学習研究

- 1年 情報リテラシー学習，校外学習（社会）
- 2年 コース別学習，修学旅行事前学習，校外学習（理科）
- 3年 コース別学習・特別選択学習，修学旅行事前／事後学習，校外学習（美術）

7. 国際教育

- (1) イングリッシュ・ルーム開設（7年次）
- (2) アメリカ短期留学（7年次）
- (3) シンガポール交換留学（12年次）

（文責：関谷 文宏）

筑波大学附属高等学校の研究概要

筑波大学附属高等学校においては、「研究・教職部」が担当組織となり、さまざまな研究活動を行っている。とくに教科教育に関しては、専門性を活かしたカリキュラム研究や指導法の研究に積極的に取り組んでいる。また、文部科学省が開始した事業の一つであるスーパーグローバルハイスクール（SGH）の幹事校として2014年度から指定され、国際交流においても多彩な教育活動を展開し、その成果を発信してきた。この期間中に、課題解決学習と、そのための知識・技能を習得させる「SGHスタディ」のカリキュラムを開発し、それらは、その後も「筑附スタディ」として継続している。

その他、教育局との連携による生徒指導、筑波大学生を中心とした教育実習生の指導を行う中での教員養成とその研究なども、継続的に行っている。

1. 研究大会

第69回研究大会を、12月7日（土）に開催した。各教科とも、1～2時間の公開授業を行い、それぞれにテーマを設けて協議会を持った。全国から約430名の参加者があり、各教科とも活発に討議が交された。なお、今年度も、教員免許状更新講習としての附属高校実践演習を同時に開催した。

【講演】南風原 朝和 氏（東京大学名誉教授、元東京大学入試担当理事・副学長
前東京大学高大接続研究開発センター長）

「高大接続で重視される力ーいわゆる「学力の3要素」の批判的検討ー」

教科	公開授業 テーマ	分科会 テーマ
国 語	新科目に向けた漢文の授業 ～既存の定番教材の発展的活用～	新教育課程を見据えた授業アイディア
地歴公民	単元の導入としての授業 人工知能（AI）を／から考える	次期学習指導要領を見据えて（続き）
数 学	データの分析 整数の性質	新学習指導要領を見据えて
理 科	無機化合物の実験	新教育課程を見据えた授業実践と課題
保健体育	2年女子創作ダンス	社会の変化と保健体育科の使命Ⅲ ～創作ダンス・クラス作品作りから見えること～
外 国 語	「主体的・対話的で深い学び」を 促す授業を目指して	新学習指導要領を見据えた授業を考える
家 庭	四月最初の授業	新学習指導要領に向けて

2. SGH（スーパーグローバルハイスクール）関連

（1）SGHスタディ優秀研究発表会

9月14日（土）にSGH優秀研究発表会を開催した。これは、SGH（スーパーグローバルハイスクール）としての本校の取り組みを校内だけでなく対外的に発信するためのものである。当日は、清水孝雄・国立国際医療研究センター研究所長、野城智也・東京大学教授、江口真理子・UBS グループ 広報部ディレクター、八十川弘子・同時

通訳者にご来校いただいた。

3 学年 SGH スタディ優秀研究として 4 つのグループが発表し、先生方には生徒の活動や成果をよく知っていただくことができた。

(2) 海外派遣 (SGH プログラム) 2019 年度分

① シンガポール相互短期留学

3 月 24 日～4 月 1 日 本校生 9 名訪問 6 月 3 日～6 月 9 日 HWA 校生 9 名来校

② 日中相互交流

7 月 12 日～7 月 13 日 中国生徒 10 名来校 10 月 14 日～21 日 本校生 10 名訪問

③ アジア太平洋ヤングリーダーズサミット (APYLS) 7 月 21 日～7 月 28 日

本校生 3 名が APYLS に参加。13 カ国 79 名の生徒達とディスカッションを行った。

④ 国際学術シンポジウム (HAS) 7 月 22 日～26 日

本校生 3 名が参加。韓国ソウル郊外 Hana Academy Soul にて研究発表を行なった。

⑤ UPEI 研修 (カナダ・プリンスエドワード島大学 (UPEI) での研修) 8 月 10 日～26 日

本校生 16 名。研修や、国際バカロレアの高校生とのディスカッションを行った。

⑥ 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

8 月 22 日～9 月 1 日 フランスにて、本校生 2 名が参加。

3. 四校研

大塚地区の附属小・中・高及び大学で四校研を実施し、教科教育を中心に研究している。今年度は 5 月 20 日、10 月 21 日、1 月 20 日に実施した。筑波大学の中期目標に即し、「グローバルな素養を育てるカリキュラム研究」というテーマで活動をしてきた。

4. 校内研究会

会議と研究会を隔週で行っており、研究会では、校内で検討すべき諸問題を取り上げて討議している。また、8 月末・3 月末には、防災体制や生徒指導に関わる諸問題、入試等のテーマを設け、半日をかけて検討している。

5. 研究紀要

研究紀要は、教科・委員会・個人等の研究成果をまとめて年一回発行している。

昨年度は第 60 巻が、2019 年 3 月に発行された。今年度末に第 61 巻が発行予定である。
(60 巻内容)

- ・ 格子点ゲームを題材とした授業の開発

— 相手が納得する説明文を書き上げる証明活動に焦点を当てて — 三輪 直也

- ・ 進路が決まった 3 年生を対象とする読書会 2

熊田 亘

- ・ 英語の授業での「やり取り」を分析する

Examining Oral Interactions in High School English Classes 矢田 理世

- ・ 社会の変化と保健体育科の使命 第二報 — 生徒の変化とスポーツ指導 —

中塚 義実, 今西智津子, 貴志 泉, 鮫島 康太, 征矢 範子

(文責 岡部玉枝)

筑波大学附属駒場中・高等学校の研究概要

1. 研究開発

(1) 文部科学省研究開発「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」（第4期・第3年次）

過去15年間のSSH指定による研究開発の成果を評価され、平成29年度より33年度まで第4期目となる5年間の指定を受けた。今年度(2019年度)はその第3年次となる。

① 研究開発課題

「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探究型学習システムの構築と教材開発」

② 研究の概要

過去15年間のSSH指定による研究開発（第1期「先駆的な科学者・技術者を育成するための中高一貫カリキュラム研究と教材開発」、第2期「国際社会で活躍する科学者・技術者を育成する中高一貫カリキュラム研究と教材開発—中高大院の連携を生かしたサイエンスコミュニケーション能力育成の研究—」、第3期「グローバル・サイエンティストを育む中高大院連携プログラム開発」）による実績を踏まえ、第4期SSHでは、主体的・協働的な学びを通して、自ら設定した研究課題に対して探究する理数系人材の育成を目的とする。また、中高生の成長過程に即したカリキュラムと学習プログラムを開発・実践し、それらを有機的に連動させた学習システムの構築を目標とするとともに、その成果を社会に積極的に発信し、他校との共有を図る。第4期では、以下の4つを研究開発の柱とした。

1. 国際社会に貢献する科学者・技術者を育成する探究型学習の教材開発と実践
2. 主体的な探究活動をするための基礎力育成カリキュラムの開発と実践
3. 探究型学習を実践するためのプログラム開発とサポート体制
4. 探究型学習システムの構築と他校への発信・共有・検証

③ 第3年次の実践

5年計画の第3年次は、研究を具体的に展開する。第2年次までに試行した内容について、再検討を行い本格的な実施に取り組む。また、継続的に実践している内容については、再検討・改良などを行い、成果の普及を進める。

(2) 社会貢献プロジェクト「筑駒アカデメイア」

（若葉会（本校OB会）「筑駒人材バンク」を活かした地域貢献）

筑波大学社会貢献プロジェクトの一環として始まり、平成19年度からは、校内プロジェクト委員会（P3）を中心として、計画、立案、運営を行っている。

今年度も近隣地域住民等を対象とした講演会を開催した。また、2020年3月28日（土）には、地域住民、生徒、児童対象の公開講座を開催予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

公開講演会 2019年11月16日（土）「これからの人生と投資の思考法」

柴山 和久 氏（ウェルスナビ株式会社代表取締役、本校OB）

公開講座 2020年3月28日（土）9講座（英会話、世界史、ジャグリング、将棋、数学、パズル、科学実験、法律、演劇）実施予定 → 中止

2. 研究会・研修会関係

(1) 第 45 回教育研究会 2019 年 11 月 23 日（土）

午前には、様々な SSH 活動の実践と主体的な学びを重視した、4 教科の授業を公開した。午後には、数学教育学がご専門の西村圭一氏をお招きし、教科横断的な探究的学びに関するご講演をいただいた。

研究主題「主体的で探究的な深い学びをめざして」

公開授業（中 1・高 2 国語／中 2・高 1 数学／中 2・高 1 保健体育／中 3 美術）

研究協議会（国語・数学・保健体育・美術）

講演会「探究的な学びの「実装化」ーすべての学校で、すべての生徒にー」

西村 圭一 氏（東京学芸大学教授）

(2) 校内研修会

第 1 回 2019 年 6 月 19 日（水） テーマ「新教育課程作成に向けて」

「海外生徒引率報告（アメリカ・韓国）」「今期 SSH（第 3 年次）の実施状況」

第 2 回 2020 年 2 月 19 日（水） テーマ「プロジェクト中間報告」「教科「道徳」実施報告」「次期 SSH について」

(3) SSH 数学科教員研修会（数学）

2019 年 8 月 28 日（水）沖縄県立球陽高等学校にて、SSH 校『数学』分野の実践事例報告や開発教材に関する研究協議が行われ、本校数学科教員が参加した。

3. 校内研究プロジェクト関係

(1) 教科・分掌ごとの研究プロジェクト 計 8 つの研究プロジェクト

（教科）国語、社会、数学、理科、保健体育、技術・芸術、英語、および生徒部

(2) 校内プロジェクト委員会 全教員が以下の 1 つに属し、年 8 回の会合を持った。

プロジェクトⅠ（P 1／「生徒の可能性の発掘」プロジェクト）

プロジェクトⅡ（P 2／「学びとカリキュラムのデザイン」プロジェクト）

プロジェクトⅢ（P 3／「協働・コラボ推進」プロジェクト）

プロジェクトⅣ（P 4／「教育のグローバル化検討」プロジェクト）

(3) 筑波大学・附属駒場中・高等学校連携小委員会 2019 年 7 月 10 日（水）

高校 2 年生の筑波大学研究室訪問に合わせて毎年行われている。第 4 期 SSH 事業や上記の校内プロジェクトについて担当者より報告し、大学側委員からは助言や提案をいただいた。

(4) 個人研究

全教員が「個人研究」のテーマ等を論集で報告する予定である。（個人研究論文 6 本）

4. 研究報告書関係

(1) 「第 46 回教育研究会報告書」 2020 年 2 月発行

(2) 「スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書・第三年次」2020 年 3 月発行

(3) 「筑波大学附属駒場論集 第 59 集」 2020 年 3 月発行予定

（文責：山田忠弘（教諭・研究部））

附属坂戸高等学校の研究概要

1. はじめに

附属坂戸高等学校は、2019年度より、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」事業の後継事業に位置づけられている、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の管理機関に筑波大学が指定され、その拠点校となった。高等学校等の先進的なカリキュラム研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等を通じて、高校生へ高度な学びを提供する仕組み（ALネットワーク）の形成を目指していくこととなった。WWL、国際バカロレア、高大連携を中心課題として、研究開発をすすめている。

2. 本校の現状

本校の現状について、上記、3課題についてそれぞれまとめる。

（1）WWL 事業について

①開発構想名

国際フィールドワークを通して持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築

②研究開発の概要

次世代のグローバル人材育成を念頭に、社会課題の発生している現場での「国際フィールドワーク」を積極的に取り入れた体系的な探究型カリキュラムを開発し、国際社会において文化の異なる海外の人々と協働して社会的問題に取り組み、問題提起から解決に至る過程でリーダーシップ及びフォロアーシップを発揮できる人材を育成するシステムを構築する。また、高校生が主体的に発表・共有し、世界に発信する場として、国内外連携校・国内外の大学と研究機関・アセアンの国際機関や企業等とネットワークを形成し、国内外の高校生が一堂に会する「高校生国際SDGs会議」を開催する。更に10年後には、SGUとして海外に13のオフィスを持つ筑波大学の世界展開力を附属学校として活用し、アジアから世界にネットワークの輪を広げ、世界の舞台で活躍できるグローバル人材の育成システムの構築を目指す。

（2）国際バカロレア日本語ディプロマプログラムについて

2017年2月に、国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラム「国際バカロレア（IB）」の「日本語ディプロマプログラム」の認定校となった。2018年4月入学生からIB受講生が入学し、2019年度から授業を開始している。文部科学省は、グローバル人材育成の観点から、我が国におけるIBの普及・拡大を推進し、埼玉県内では本校が初の認定校となった。これまでの生徒募集活動とあわせて、在外の日本人学校への募集活動や、国際連携協定校等との連携もすすめている。国際バカロレア資格は、国際的に通用する大学入学資格として、国ごとに具体的な取扱いは異なるものの、世界の多くの国々の大学において、大学入学資格として幅広く受け入れられている。本校のIB1期生が2020年11月にIBDP最終試験に臨む。

(3) 高大連携について

①「高校生国際 ESD シンポジウム@東京」と

「SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo」

アセアン各国の高校生および教員を招待し本校の生徒・教員とともに持続発展可能な社会づくりに向けたシンポジウムを開催することを通して、参加者とその在籍校生徒・教員が持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的に実施している。また、2015 年度から全国の SGH 校、SGH アソシエイト校にも参加を呼びかけ、2019 年度はあらたに筑波大学地球規模課題学位プログラムの教員・留学生が参加し実施した。毎年、筑波大学東京キャンパスで実施している。

②「大学教員による特別講義」

1 年次科目「産業社会と人間」において、1 学年の生徒全員が筑波大学を訪問し、複数の分野の教員から特別講義を受けたり、研究室の訪問を実施している。

③「世界展開力事業「ASEAN 横断型グローバル課題挑戦的教育プログラム」との連携」

AIMS プログラム (ASEAN International Mobility for Students Programme) で筑波大学に留学中のアセアン各国の学生が本校を訪問し、課題研究や文化交流に関するプログラムを行っている。文部科学省の指定期間は終了したが、継続して実施していく。

④「生物資源科学インターンシップ I」

平成 25 年度より実施しており、本校前校長で生命環境系の加藤衛弘先生が担当している。生命環境科学専攻の大学院生が自身が行っている研究について、生徒に出前授業を行う内容である。本校の 2～3 年次の生物資源・環境科学の科目群に所属する生徒に対して授業を行っている。卒業研究にむけ、最新の研究を知る良い機会となっている。

⑤総合地球科学入門

地学的な事物・現象が、生物や人間の生存に適した地球環境の形成に密接に関連していることを野外実習により経験的に学ぶ。久田健一郎教授(生命環境系)の協力のもと、夏期休業中に長野県黒姫高原で実施している。

⑥つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC) での生徒実習

毎年夏季休業中の恒例行事となっている実習である。センターの協力のもと、2 年次「農場実践」を選択した生徒たちが充実した実習を体験している。農林技術センターが遺伝子実験センターに統合され、新しく「つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC)」となり、同センターで実施している。

⑦オリンピック・パラリンピック教育

筑波大学は、平成 22 年 12 月嘉納治五郎生誕 150 周年を記念して、新たに「オリンピック 教育プラットフォーム (CORE : Centre for Olympic Research and Education)」を設立した。これを機会に本校でも 22 年からオリンピック・パラリンピック教育に関する理論的研究と教育実践を推進し、筑波大学と連携をはかっている。

⑧SEAMEO (東南アジア教育大臣機構) との連携について

SEAMEO 共同機関 (Affiliate Member) である筑波大学と連携して、アセアンの大学生の教育実習を受け入れるなど、グローバル教育に関するパイロット事業を実施している。

(文責：建元喜寿)

筑波大学附属視覚特別支援学校の研究概要

1. はじめに

附属視覚特別支援学校は、幼稚部から職業課程の高等部専攻科まで幅広い教育課程を有し、視覚に障害のある幼児・児童・生徒に対して個々の発達段階に応じた教育・支援を実践している。また本校教員は、最早期（0歳児から2歳児まで）の乳幼児の育児相談や支援、通常学校に在籍する児童・生徒とその指導者への支援、大学課程や各種学校に進学した生徒の在籍校からの様々な相談への対応や支援、さらには卒業後の就労に関する支援など、視覚障害教育・支援におけるセンター的な役割を担っている。

現在、他の盲学校（視覚特別支援学校）の多くが、少人数化や重度重複化に加え定期的な人事異動等により、視覚障害教育における教科および領域の専門性の維持、継承ならびに発展が困難な状況となっている。このような現状からも、附属視覚特別支援学校は、各種研究活動や情報発信などの重要なミッションを継続していくことが重要である。

本年度も昨年度に続き、これまで取り組んできた視覚障害教育の実践に加え、その専門性の継承と発展に取り組んでいる。また、本校特有の幅広い階層教育間での連携を強化するために、校内での情報共有化と専門性の向上を目指した校内研修会の定期的な開催、各種研修会・研究会の開催など、教員の積極的な参加の促進に努めている。

さらに、視覚障害教育の国際教育拠点として、特にアジア諸国への情報発信および共同研究を継続している。平成28年度からインド共和国における視覚障害者の職業自立支援の一環として国際交流協定を結び、今年度はタイ王国・タイ視覚障害者支援クリスチャン財団と国際交流協定を結ぶなど、交流を発展させている。

連携教育の推進においては、教育局や特別支援教育連携推進グループ等を通して、大学や他の附属校との連携研究・研修会にも積極的に参加し、更なる専門領域の拡充を目指している。

2. 研修会及び研究会

【主に校内対象の研修会】

- ・ 2月25日（火） テーマ「児童虐待対応の基礎」
講師：堀口 康太 氏（筑波大学附属学校教育局）

【校外向け研修会・研究会】

- ・ 全国盲学校音楽科設置校研究協議会 6月7日（金） 京都府立盲学校
- ・ 視覚障害教科教育研究会 7月22日（月）～23日（火） 広島
- ・ 歩行指導者研修会 7月22日（月）～26日（金）
- ・ 視覚障害に配慮した算数・数学教育に関する研修会 7月27日（土）～29日（月）
本校
- ・ 寄宿舍研究・実践交流会 7月29日（月）
- ・ 日本視覚障害理科教育研究会（JASEB）研究大会 7月29日（月）～7月30日（火）
本校

- ・日本視覚障害社会科教育研究会 7月29日（月）～7月31日（水）
埼玉県立特別支援学校塙保己一学園・川越市立博物館
- ・視覚障害者スポーツ研修会 7月29日（月）～ 7月31日（水） 本校
- ・盲学校理学療法科担当教員講習会 7月31日（水）～8月2日（金） 本校
- ・楽譜点訳研究会 令和元年8月28日（水） 本校
- ・点字指導者研修会 10月5日（土）～6日（日）
- ・理療教育研究セミナー 10月11日（金） 本校
- ・音楽科研究演奏会 11月1日（金） 本校
- ・視覚障害算数・数学教育研究会 11月30日（土） 京都府立盲学校
- ・全国視覚障害早期教育研究会 1月25日（土）～1月26日（日） 岐阜

3. センターの役割に関する内容

- ①各部科毎の教育相談・就学相談の実施と支援
- ②家族支援・育児支援・発達支援・保育支援ならびに教材・教具の紹介や提供
- ③通級による指導，巡回指導
- ④在籍校支援と進学就労支援・点訳支援
- ⑤「科学ヘジャンプ」全国版及び「地域版」における講座講師及び主催
- ⑥視覚障害教育ノウハウの発信としての公開講座等
 - （1）免許法認定公開講座
 - （2）免許状更新講習講座
 - （3）公開講座「視覚障害教育基礎講座」（8月）
 - （4）筑波大学人間系障害科学域授業「視覚障害指導法」（11月）
 - （5）公開講座「盲・弱視児童生徒理科実験指導研修講座」（2月）
 - （6）公開講座「視覚障害教育における自立活動の理論と実際」（2月）
- ⑦第17回学校公開 6月12日（水）実施 （232名参加）
- ⑧第16回視覚障害教育研究協議会 2月15日（土）実施 （216名参加）
公開授業を実施し，その後以下のテーマについての研究協議を行った。
 - テーマ1 運動あそびの取り組みについて （幼稚部）
 - テーマ2 視覚障害のある児童が主体的に学ぶために その3 （小学部）
 - テーマ3 障害の重複化、多様化に対応した指導の在り方
～発達段階を踏まえた実態把握に基づく課題設定～ （小学部）
 - テーマ4 手書きの実践 その1 ～文章を書く力～ （国語科）
 - テーマ5 新学習指導要領を見据えた社会科の教材と指導法を考える （社会科）
 - テーマ6 単元の導入段階に必要な算数・数学的イメージ
～文字式の計算（中1）～ （数学科）
 - テーマ7 感光器を用いた観察と実験 （理科）
 - テーマ8 豊かな感性を育むために （音楽科）
 - テーマ9 立体表現（粘土） （美術科）
 - テーマ10 陸上競技の指導 （保健体育科）
 - テーマ11 ものづくり（家庭科編） （技術家庭科）

- テーマ 1 2 読書バリアフリー法制定の意義と今後の課題 (英語科)
- テーマ 1 3 中高生を中心とした点字指導について その 3
～読み教材の作成と工夫～ (自立活動)
- テーマ 1 4 あん摩・鍼灸臨床実習前施術実技試験の在り方について
～認定規則改正にともなう追加カリキュラムの実施に当たって～
(鍼灸手技療法科, 理療教育研究セミナーとして 10 月に実施)
- テーマ 1 5 自分でできる浴衣の着付け (寄宿舍)

4. 出版物を通した研究活動

- ①視覚障害教育ブックレットの発刊 (年 3 回)
- ②研究紀要 第 5 1 巻発行

5. 各種事務局を通した研究活動

日本理療科教員連盟, 全国盲学校普通教育連絡協議会, 関東地区理療科研究会, 全国盲学校音楽科設置校連絡協議会, 全国視覚障害早期教育研究会, 全国盲学校理学療法教育研究会, 日本視覚障害社会科教育研究会, 視覚障害算数・数学教育研究会, 全国盲学校体育連盟, 東京都弱視教育研究会, 関東地区点字研究会, 日本視覚障害理科教育研究会 (J A S E B), 全国高等学校長協会入試点訳事業部 等

(文責 森嶋 政晴)

筑波大学附属聴覚特別支援学校の研究概要

1. はじめに

本校は、両耳の聴力レベルが概ね 60 デシベル以上で、補聴器等の使用によっても話声の理解が不可能か著しく困難な障害がある幼児・児童・生徒（学校教育法施行令 22 条の 3）に、その障害による困難を克服するために必要な知識・技能を授け、幼稚園・小学校・中学校・高等学校に準ずる「対応の教育」を行うことを基本方針とする。この方針のもと、一定規模の学習集団を確保し、一貫した教育に基づき、確かな日本語力・学年対応の学力・年齢相応の社会性を育み、自立した社会人の育成を教育目標とする。本校は、聴覚障害児教育の可能性の追究、実践的な研究の推進による教科指導法の専門性にかかわる事項の追究、教育実習と介護等体験実習、現職教員研修、国内外からの聴覚障害教育関係者等の参観の受入れを通して、この教育の発展に貢献することを使命とし、その成果を全国に発信することをもって啓蒙・啓発を行う。

3 歳未満の乳幼児教育相談も担当する幼稚部は日本語の基礎力の育成、小学部は日本語力の育成をめざして児童の実態に応じた教材・教具を工夫した授業展開の実践、中学部は基礎学力の向上と生徒の学ぶ意欲を伸ばすための個に応じたきめ細かな指導、高等部普通科は習熟度別学習グループによる教科指導と大学や専攻科への進学や就職への準備など個々の生徒の進路に応じた類型編成による教育課程による指導を行い、高等部専攻科（造形芸術科・ビジネス情報科・歯科技工科）は各専門分野の学習を通じて生徒の個性を十分に伸ばさせ、社会自立できる人間の育成をめざしている。また、遠方の生徒のために寄宿舎を併設し、寄宿舎指導員と舎監による生活指導を行っている。各学部は、通常学校との交流や対外試合、公募展への応募などにも積極的に取り組んでいる。また国立パリ聾学校や国立ソウル聾学校と国際交流協定を締結し、生徒の相互訪問を通してグローバル化に対応できる教育にも力を注いでいる。

2. 研究活動

令和元年度の研究課題は次のとおりである。

幼稚部は「幼稚部における言語指導の実践的研究」、小学部は「確かな力をつける教科指導を目指して」

中学部は「思考力の向上を目指した授業づくりのための取り組み」他、「『確かな学力』の向上を目指した ICT を活用した実践」、「基礎学力向上に向け、個に配慮した読み・書き・計算に関する取組」、高等部普通科は「聴覚障害生徒に『確かな学力』を身につけさせるための指導法の追究」他、「生徒の実態・進路に応じた教育課程の検討」、高等部専攻科は「確かな知識を身につけるための指導方法の研究」、寄宿舎は「基本的生活習慣を確立させる」である。この他、各教員が研究テーマを定め、自己研鑽に努めている。

3. 研究と成果の発表

今年度の各学部の研究と個人研究の成果は、以下の場で発表、発信された。

(1)「筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要」（第 42 巻：2020 年 3 月 6 日発行）執筆 21 件

研究：「聴覚障害幼児の発達に関する検討～入学時と修了時における実態差を中心に～」

(小柳達朗・土手信),「心と言葉の育ちを促す教師のかかわりについて～絵本の読み聞かせの場面を通して～」(杉山砂寿・佐藤幸子・佐藤輝子),「乳幼児及び幼児への補聴器フィッティングにおけるねらいと効果に関する一考察」(土手信),「高大連携プロジェクトにおける細胞生物学講座の取組」(久川浩太郎),「聴覚障害児に対する反転授業の実践事例とその評価について」(西分貴徳),「中学部生徒用『マナー・クエスト』とオンラインテストを活用した実践と評価」(内野智仁・半沢康至)

報告：「聴覚障害児の早期支援の充実に向けた連携について～『聴覚障害早期教育公開研修会』の取組を通して～」(鎌田ルリ子),「聴覚障害幼児の言語発達に関する縦断的検討～補聴機器装用閾値と新版 K 式発達検査の成績との関連について～」(小柳達朗),「絵日記指導におけるねらいと言語発達に関する一考察 ～A 児の事例を通して～」(小柳達朗),「乳幼児教育相談における保護者支援～講座の取り組みを通して～」(桑原美和子・山中健二・森敬子・土手信・日高雄之・鎌田ルリ子),「親子が共に育つ保護者支援を目指して ～A 児との 2 年間の取り組みを通して～」(山中健二),「特別支援学校(聴覚障害)の乳幼児教育相談における保護者支援 –『週の記録』に記述された母親の不安や疑問に焦点を当てて–」(吉野賢吾),「小学部における音楽科教育の実践～音楽の基礎的な力を身につけるために」(山本カヨ子),「本校中学部における書き言葉の指導についてー自立活動, 特別活動等における指導を中心にー」(廣瀬由美),「公民科における聴覚障害(者)に関する内容を用いた授業の実践報告」(雁丸新一),「令和元年度 フランス国立パリ聾学校(INJS)とのオンライン交流」(久川浩太郎・澤口真弓),「国語と社会の連携授業実践」(田中優子),「新学習指導要領に向けた実践研究～英語ディベートを通しての主体的・対話的で深い学び～」(松本邦子),「令和元年度フランス国立パリ聾学校(INJS)訪問交流の報告」(久川浩太郎・澤口真弓・荒川郁朗・福地陽・石井清一),「地域の文化と誇りに焦点を当てた貼り絵の共同制作ー東日本大震災の復興支援活動の実践からー」(橋本時浩)「令和元年度幼児児童生徒の聴力の実態良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者数」(桑原美和子・山中健二・土手信・太田康子・石津勝基・長島素子・奥野巧三・石井清一)

(2)「第 53 回全日本聾教育研究大会」(富山県高岡市: 2019 年 10 月 17 日～18 日)での口頭発表 11 件

「特別支援学校(聴覚障害)の乳幼児教育相談における保護者支援 ～『週の記録』に記述された母親の不安や疑問に焦点を当てて～」(吉野賢吾),「聴覚障害児の早期支援の充実に向けた連携について」(鎌田ルリ子),「親子が共に育つ保護者支援を目指して ～A 児との 2 年間の取り組みを通して～」(山中健二),「心と言葉の育ちを促す教師のかかわりについての一考察 ～絵本の読み聞かせの場面を通して～」(杉山砂寿・佐藤幸子・佐藤輝子),「絵日記指導におけるねらいと言語発達に関する一考察 ～A 児の事例を通して～」(小柳達朗),「聴覚障害児に分かる音楽の授業をめざして」(山本カヨ子),「動画を用いた予習復習用教材の作成とその効果及び, 当教材を用いた授業デザインについて」(西分貴徳),「公民科『現代社会』における聴覚障害(者)に関する内容を用いた授業の実践報告」(雁丸新一),「ことば遣いを育むための「中学部版マナー・クエスト」を活用した個別学習の実践」(内野智仁・半沢康至),「乳幼児及び幼児への補聴器フィッティングにおけるねらいと効果に関する一考察」(土手信),「聴覚障害児童の「声を目で見る」発語学習」(太田康子)

(3) 季刊誌『聴覚障害』（2019 年度春，夏，秋，冬号）への執筆 10 件

「大阪府立だいせん聴覚特別支援学校に『災害ボランティア活動』について聞く」（大谷津和之・西俣稔子），「韓国国立ソウル聾学校及び私立サンソン学校視察」（手塚清・佐藤輝子・石井清一・鄭仁豪），「社会の変革と近未来の聾学校」（鄭仁豪），「特別支援学校（聴覚障害）における中学部の美術科の指導について～新学習指導要領が示す方向性を基にして～」（橋本時浩），「聴覚障害児の書く力を育てる」（佐渡雅人），「社会で活躍する聴覚障害者」（大谷津和之・木村美津子・伊藤海），「教育実践経験に学ぶ」（加納彩子・内野智仁・木村美津子・橋本時浩）

(4) 学会などの発表 2 件

「聴覚障害生徒のオノマトペの使用傾向と指導法」（田中優子） 筑波大学学校教育論集 第 42 巻

「音楽科の授業を通して言葉の力を育む」（山本カヨコ） 東海教育オーディオロジー研究協議会

(5) 産学連携研究 1 件

「ワイヤレス補聴システムの効果に関する研究」（ソノヴァ・ジャパン株式会社）

(6) 科研費（奨励研究）1 件

「聴覚障害学生の歯型（形）彫刻における視覚的な3次元フィードバック資料による指導」（福島恵美子）

(7) 受賞 1 件

「音楽の授業で聴覚障害児が楽しくリズム感を育むための指導の試み」（山本カヨ子） 第 35 回東京書籍教育賞入選

(8) 文部科学省へ事業申請を行い採択された研究 3 件

委託事業

・文部科学省 令和元年度特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業 第 46 回聴覚障害教育担当教員講習

・文部科学省 令和元年度特別支援教育に関する実践研究充実事業

「聴覚障害教育における ICT を活用した主体的・対話的で深い学びの授業づくりに関する実践研究」

・文部科学省 2019 年度特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）

新学習指導要領に示される聴覚障害の状態等に応じた言語活動の充実 ～人工内耳装用児に対する全国調査と実践研究に基づいて～

4. 研修会等の取組

関東地区聾教育研究会主催の「令和元年度聾教育実践研修会」を開催し，各学部の指定・公開授業と，校長と本校教諭による講義を行った。（2019 年 6 月 13 日～14 日）

文部科学省・筑波大学共催の「第 46 回聴覚障害教育担当教員講習会」を「特別支援学校や難聴学級等に在籍する聴覚障害生徒の課題と指導のあり方」を主題として開催し，各学部の公開授業，高等部専攻科の指定授業，外部講師による講演を行い，全国の高等部の専攻科の拠点校から講師を招き「高等部専攻科の現状と課題」についてパネルディスカッション

ョン方式で情報交換と提言を行った。(2019年11月13日～15日)

本校幼稚部が主催し「聴覚障害早期教育公開研修会」を開催した。医師，言語聴覚士，保育士，保健師など約80人が参加した。(2020年2月14日)

5. 国際教育拠点事業の取組

国際交流協定を締結している韓国の国立ソウル聾学校中学部生徒と本校の中学部生徒がオンライン交流を行った。また教員4名が訪韓し令和2年度からの生徒の相互訪問交流の実現に向けての協議を行った。(2019年12月1日～3日)

同じく国際交流協定を締結しているフランスの国立パリ聾学校高等部生徒と本校の高等部生徒がオンライン交流を行った(2019年11月22日)。12月には教員5名と高等部生徒9名がパリ聾学校を訪問して授業や行事を通して交流活動を行った。(2019年12月8日～13日)

(文責 橋本 時浩)

筑波大学附属大塚特別支援学校の研究概要

1. はじめに

本校の学校研究活動は学校研究「三つの教育拠点構想」「4つの取り組み」がある。

1つ目は学校研究である。学校研究では全校で一つのテーマを設定し、研究するものがあり、一昨年度から3か年計画で「個別教育計画」をテーマに取り組んできた。2つ目は、筑波大学附属学校教育局の掲げる三つの教育拠点構想（「先導的教育拠点」「国際的教育拠点」「教師教育拠点」）に基づいた研究活動である。この拠点構想は筑波大学の附属11学校が共通して取り組んでいる課題である。3つ目は、4つの取り組みである。これは「先導的教育拠点」を本校の取り組みとして具体化したものであり、「ミライの体育館」「インクルーシブ教育」「オリンピック・パラリンピック教育」「ICT教育」として取り組んでいる。

これらの学校研究活動を、幼児児童生徒・保護者・教師が大学等の研究者と「連携」し、それぞれの研究課題や授業作りの「向上」を目指す。そしてそこから得られた成果や知見を地域や国内に「発信」といった、スローガンで学校力を高め、知的障害教育の拠点としての自覚と使命をもって教育・研究を進めてきた（Fig.1）。（文責：根本）

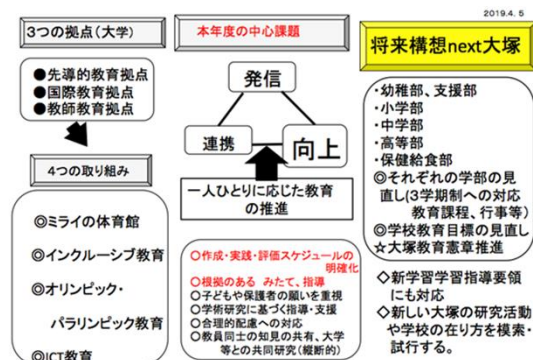


Fig.1 大塚特別支援学校が目指すもの

2. 3つの教育拠点構想 国際教育拠点の取り組みに焦点をあてて

本校は、2017年よりインドネシア共和国のチパガンディ特別支援学校（以下＝SPLB-C）と国際教育研究交流協定を締結し、授業研究を通して教員の授業力および特別支援教育の専門性の向上を図ることを目的に教員間交流を行っている。今年度は、さらなる研究交流を推進するため学校同士をインターネット回線で結んだWeb会議での交流を計画した。SPLB-Cの教員が行う授業動画や指導案を事前に確認し、授業内容について意見交換をするといった内容である。

Web会議には、SPLB-Cの教員約15名、本校教員がおよそ20名、インドネシア教育大学の学生が20名程参加した。重度知的障害児の集団活動への参加について、双方の教員間で、同様の課題を有していることが共有され、その手立てについて多くの意見が交わされ大変有意義な機会となった。SPLB-Cの教員からは「具体的なアドバイスを受けることができて大変嬉しかった」との感想がきかれた。国や文化の違いはあるが、障害のある生徒を思う気持ちや一人ひとりを尊重した指導が大切であることが改めて会議を通して共通理解することができた。（文責：仲野・飯島・若井・佐藤義・紅林）



Fig.2 Web会議時の本校の様子

3. 4つの取り組みにおける教育研究活動

1) オリンピック・パラリンピック教育

本校では2016年度より、オリンピック・パラリンピックを学校の重点プロジェクトとして位置づけ、幼稚部から高等部までの全校を挙げて取り組んでいる。オリパラ教育の目標は①生涯スポーツを通じたスポーツ活動、②多様な価値観、③他者への敬意、の3つを柱に据えている。これらを実現するために、今年度は、「大塚オリパラデー2019」を全5回（6月2回、10月、11月、1月）開催した。実際の体験を通して、様々な人と関わることができたり、楽しみながら活動に参加することで興味・関心を広げていくことができるといった幼児・児童・生徒の特性を踏まえて、ソーラン節・ドジョウすくい踊り・オリパラ開催都市に関連したクイズを行い活動参加への意欲を高めたり、スポーツ体験を通して、楽しみながらスポーツに取り組めるよう工夫をした。（文責：紅林・原田・飯島・仲野）



Fig.3 スナッグゴルフ

2) ミライの体育館®

『ミライの体育館®』は、2014年から筑波大学と慶応義塾大学で進められている共同プロジェクトの一環である。本校の体育館天井に子ども達の活動の様子を計測するカメラと活動に合わせて床や道具などに映し出されるプロジェクターを設置し、プロジェクション・マッピングの技術を活用して、子ども達の行動を支援し、活動することの楽しさを共有する中で社会性の形成を目指すものである。

本プロジェクトを進める上で、月に一度、定例会又は研究会を本校にて開催している。以下に代表的な各部の取り組み内容を紹介する。

(1) 小学部

対象：附属駒場高校生（16名）、本校小学部児童（23名）

活動内容：高校生の作った3つのゲームコンテンツ「わくからはみでるな!」「たからにたどりつけ」「すごろくげーむ」を、高校生と本校児童と一緒に体験した。迫ってくる赤い枠から逃



Fig.4 わくからはみでるな

げながら動いたり、動いてくるくもを避けながら宝に向かって一コマずつ進んだり、ミッションをクリアしながらゴールに向かったりと、それぞれ工夫されたゲームを楽しみながら、高校生と関わることができた。ミライの体育館を活用することで、児童が自ら分かって動き、高校生と交流することができた。

(2) 高等部

対象：附属坂戸高校生徒（32名）・本校高等部生徒（23名）

活動内容：交流および共同学習において、「ペインティングゲーム（一定時間、決められた範囲を動き回ることによって床面に色を塗っていく。より隙間なく色を塗ったチームが勝ち）」を用い、アイ



Fig.5 ハイタッチの様子

スブレイクを行なった。どうすれば高得点を出せるようになるのか試行錯誤する中で、自然に会話が生まれたり、手を繋ぎあったり、結果を喜びハイタッチしあったりするなど、仲が深まる様子が見られた。（文責：石飛）

引用文献：

筑波大学附属大塚特別支援学校(2020) 研究紀要 第64集.

附属桐が丘特別支援学校の研究概要

1. はじめに

当校は国立大学法人附属唯一の肢体不自由校として、肢体不自由教育における教育と実践研究の先導的役割を担うことを責務としている。これを踏まえ、研究重点課題に「先導的研究」「教師教育」の2点を位置付け、全校で実践研究を行っている。

本稿では、文部科学省より受託した指定研究の3カ年事業の3年次に当たる研究について報告する。

2. 特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）

（1）研究テーマ

「学習に難しさがある肢体不自由児に対する指導の重点化、指導及び学習評価の工夫に関する研究」

（2）問題の所在と目的

特別支援学校の新学習指導要領の基本的考え方は、初等中等教育全体の改善・充実の方向性と共通しており、肢体不自由教育においても、新しい時代に必要な資質・能力を育成することである。この資質・能力を育むためには学習の積み重ねが必要だが、当校の児童生徒には学習がなかなか積み重なっていかないという実態がある。本研究は、こうした当校の児童生徒の実態に対して問題意識をもつことから始まり、各教科においては各教科の指導の重点化が学習の積み重ねには必要であるという考えのもとに行われた研究である。

当校では、各教科の指導の重点化を、①重点を置く事項の明確化、②一人一人の児童生徒の指導目標・指導内容の設定の2点に整理してきた。①として、当校児童生徒のつまずきの状況とその背景要因をとらえ、身に付きにくい事項を整理した上で、教科の特質に沿って、教科の系統性と関連させて系統表等に整理した。②として、重点的に指導する事項を踏まえて、児童生徒の指導目標・指導内容を設定し、授業実践による検証を行った。

本研究の目的は、様々な要因により学習に難しさのある肢体不自由児を対象として、指導の重点化を図り、指導目標・指導内容を設定し、授業において展開するための効果的な指導及び適切な学習評価の在り方を探り、それによって学習に難しさのある児童生徒の指導の改善に資することである。本研究では、指導の重点化に取り組む小・中・高等学校の各教科に取り組むとともに、それらを知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科（以下、知的教科）の指導に適用して、知的教科における指導の重点化の在り方についても整理する。

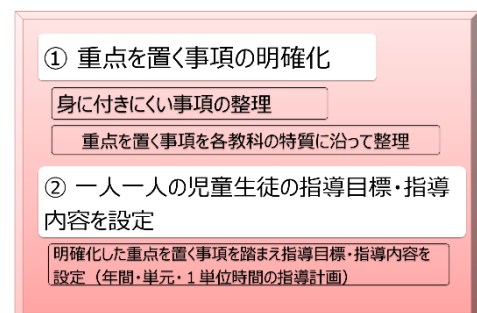


図1 各教科の指導の重点化

（３）研究対象とする児童生徒及び教科等

小・中・高等学校の各教科における指導の重点化に取り組む教科は、国語科，算数・数学科，社会科，理科，外国語科（英語），体育科・保健体育科であり，在籍する学年の下学年の教科の目標・内容で編成する教育課程（下学年の教育課程）で学ぶ児童生徒を対象とする。知的教科における指導の重点化に取り組む教科は，国語科，算数・数学科，社会科，理科であり，知的教科代替の教育課程及び自立活動を主とする教育課程で学ぶ児童生徒を対象とする。

（４）研究の結果

国語科，算数・数学科，社会科，理科，外国語科（英語）及び体育科・保健体育科の６つの教科においても指導の重点化を行うための系統を整理し，指導の重点化による実践につなげた。

知的教科においては，国語科，算数・数学科，社会科，理科の４教科で，各教科における指導の重点化の考え方を用いて，指導の重点化を図った。特に，国語科，算数・数学科においては，自立活動を主とする教育課程で学ぶ児童生徒を対象に，１事例ずつではあるが知的教科における重点化した指導の有効性を検証した。

小学校等の各教科は６つの教科において，また，知的教科は４つの教科において，各教科の特質に沿って重点的に指導する内容が明確にした。それらを用いて，個々の児童生徒において適切な指導目標・指導内容を適切に設定し，事例検討を通して検証を行った。そして，各教科においても，知的教科においても該当教科はどのような系統なのか，何を目指していくのかが明らかにした。つまりきの特徴が共通していることから，下学年の教育課程で整理した指導の重点化の考え方を知的代替の教育課程及び自立活動の教育課程に活用することができた。

（５）今後の課題

下学年代替の教育課程については，６教科について重点的に指導する内容を明確化できた。今後は，対象教科を増やすとともに，様々な発達段階の児童生徒にも広げていく必要がある。その際，知的障害を併せ有する肢体不自由児，特に自立活動を主とする教育課程に学ぶ児童生徒に対する評価の在り方についても検討する必要がある。

また，当校で整理してきた各教科の指導の重点化の考え方が，他の肢体不自由特別支援学校あるいは小学校等で学ぶ肢体不自由のある児童生徒にとっても有効であるか検証していく必要がある。広く全国にネットワークを作り，ニーズのある特別支援学校とつながり，指導の重点化の方針や方法を一緒に試みるようなアプローチも求められるだろう。そのツールとして，肢体不自由特別支援学校における遠隔授業と遠隔授業支援システムの開発について検討する必要があると考える。

３．主な研究成果の発信

- （１）第４８回肢体不自由教育実践研究協議会 令和２年２月６日～７日
- （２）第５７回日本特殊教育学会（広島大会） 令和元年９月２１日～２３日
- （３）第５６回関東甲信地区肢体不自由教育研究協議会（神奈川大会） 令和元年８月７日
- （４）第６５回全国肢体不自由教育研究協議会（青森大会） 令和元年１１月１３日～１５日
（文責 村主 光子）

附属久里浜特別支援学校の研究概要

一人一人の課題を踏まえた各教科等の授業づくり

～自立活動・体育～

1. はじめに

附属久里浜特別支援学校は、幼稚部と小学部からなる特別支援学校であり、知的障害と自閉症を併せた幼児児童 51 名が学んでいる。寄宿舎が併設されており、遠方に居住している児童 4 名が月～金曜日までの平日、共に生活をしている。また、学級や家庭と連携し、幼児児童の生活上の課題を改善するために、生活体験入舎を行っている。

本校の教育目標は、「子供一人一人の良さや可能性を伸ばし、自立し、社会参加するための基礎を培うことを目指す」である。本校に在籍する子供たちの発達の状況や障害の状態などは様々である。そこで、一人一人の多様な実態を理解し、それらに応じた適切な教育を行い、子供たちがもっている良さや可能性を最大限に伸長することが、本校の教育の基本である。

2. 過去の研究について

本校は、平成 16 年度の開校以来、8 年間は自閉症の障害特性に応じた教育課程の研究に取り組んできた。その後、平成 23 年度からは、子供たちの思いや考えといった内面の育ちに着目しながら、一人一人の実態に合わせた指導の在り方を追求するために日々の実践をベースにした研究を進めてきた。平成 27 年度からの 3 年間は、それまでの研究の成果や課題を踏まえて、子供たち一人一人が確かに育つ授業を行うためには、どのような方策が必要であるかを、実践を通して明らかにするための研究に取り組んできた。そして、昨年度から子供たち一人一人の指導課題を踏まえた各教科等の授業づくりについての研究を進めている。

3. 今年度の研究について

(1) 研究テーマ設定の理由

研究テーマ設定の理由は次の 3 点である。

1 点目は、「これまでの研究成果を生かした授業づくりを進めること」である。前述の通り、本校は、幼児児童一人一人の実態に合わせて授業づくりを進めている。特に昨年度は、自立活動の指導において、「指導課題を導き出すプロセス」やその「ポイント」について、音楽の指導については、「育てたい力」や「授業づくりのポイント」について明らかにした。それらを生かして、更に授業づくりを進めていきたいと考えた。

2 点目は、「何のために」、「何を」、「どのように育んでいくのか」を、明確にした授業づくりを推進していく必要性が示されている、新学習指導要領を踏まえて研究を進めていきたいと考えた。

3 点目は、「本校のよさ、特徴を生かす」ことである。本校は、知的障害を伴う自閉症の幼児児童を対象とした特別支援学校になって 15 年が経過した。その間、様々な実態の子供たちの実践を行ってきた。特に幼稚部、小学部を通した、9 年間の教育実践ができることは、本校の大きな特徴である。また、本校には、担任、養護教諭、寄宿舎指導員、

看護師、栄養教諭などがおり、学級の担任と寄宿舎指導員と保護者など、様々な関係者が連携しながら教育実践を進めていることも特徴の一つである。

これらのことを踏まえて、今年度のテーマを「一人一人の課題を踏まえた各教科等の授業づくり」とし、各教科の、基盤となる力を育てる指導領域である「自立活動」と「運動遊び・体育」の授業づくりについて取り組んでいくこととした。

(2) 研究の目的について

研究の目的は、次の2点である。

- ・幼児児童一人一人が、確かに育つ授業づくりの在り方を明らかにする。
- ・これまでの研究の成果を踏まえた自立活動の指導を進め、自立活動の指導事例を蓄積する。

(3) 研究方法について

ア)「確かに育つ授業づくりの在り方」を明らかにするために

①運動遊び・体育

- ・これまでの授業づくりの課題を整理し、授業づくりのPDCAサイクルをまとめる。
- ・幼児児童一人一人の実態を整理し、運動遊び・体育における指導段階や指導課題を明らかにして授業づくりを進める。

②自立活動の指導

- ・幼児児童一人一人の指導内容に応じて、指導する場、人、時間を明らかにして、指導実践を行う。

イ)「自立活動の指導事例を蓄積」するために

- ・指導計画を導き出したプロセスや指導を通した子供の変容を整理し、まとめる。

(4) 研究の経過・結果

今年度の研究では、子供一人一人の指導課題を踏まえた各教科等の授業づくりとして、自立活動と運動遊び・体育についての実践をまとめた。

自立活動の授業づくりでは、昨年度の研究の成果より、子供の困難さから指導課題を導き出すプロセスとポイントを踏まえて日々の実践を進めながら、困難さの変容を評価し、指導の見直しを行ってきた。その中で、子供一人一人の自立活動の指導内容に応じた、指導の場・人・時間を明確にした指導計画を立案することの重要性が示唆された。

運動遊び・体育の授業づくりでは、子供にとってなじみのあるものや興味・関心などの生活づくりを意識した題材設定を工夫することで主体的な学びが生まれ、教師や友達と関わって、できたことを共有することで対話的な学びが生まれ、これらが深い学びとなって、体を動かすことが好きになることが示唆された。

それぞれの取り組みの課題として、発達段階に応じた指導のポイントや、指導の系統性について挙げられた。

また、今年度、本校で初めて、幼稚部と小学部の9年間の取り組みについて1事例まとめることができた。9年間を振り返ったことで、それぞれの時期に必要なだったと考えられる指導及び支援についてまとめることができた。

(5) 今後の課題

今後は、本校の特色でもある長期の指導事例を蓄積しながら、これらをまとめることで、知的障害を伴う自閉症児の、子供一人一人の指導課題を踏まえた各教科等の授業づくりを

行う上でのポイントだけでなく，幼児期や学童期など，それぞれの段階で大切にしなければならない指導のポイントや系統性・段階性について明らかにしていきたい。併せて，更に一人一人の指導課題を明確にした授業づくりを進め，授業の評価を基に，子供たち一人一人が確かに育つ授業づくりを提案し続け，それらを整理し，年間指導計画や，単元の配列など，学部，学校全体の教育課程を見直すことを進めていきたい。

（文責 河場哲史）